米原町埋蔵文化財調査報告XI

中多良遺跡発掘調査報告書

——県営かんがい排水路事業に伴う発掘調査——

1989・3

米原町教育委員会

序

米原町内では、昭和５７年度以来ほ場整備事業、かんがい排水路事業等、農業基盤整備が各所において実施されてまいりました。これらの事業に伴い埋蔵文化財調査も行なわれ、従来知られることの少なかった遺跡の発見も相続いております。

今回かんがい排水路事業により調査いたしました中多良遺跡もその一つです。

ここにその発掘成果を報告書として刊行することとなりました。本書の刊行が地域の歴史を理解するうえでお役にたてば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に深い御理解と惜みない御協力をいただきました、地元の方々ならびに関係機関に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成元年３月

米原町教育委員会

教育長　杉村　馨

例　　言

1．本書は米原町内における昭和62年度県営かんがい排水路事業（天の川地区南幹線水路第８工区）に伴う中多良遺跡の発掘調査に関する報告書である。

2．発掘調査は、昭和62年11月24日より12月11日までおこなった。出土遺物の整理、報告書作成に関しては翌年度事業となり、昭和63年４月１日より平成元年３月31日までの間実施した。

3．調査は滋賀県の依頼により、米原町教育委員会が実施した。調査の体制は下記の通りである。

調査主体	米原町教育委員会		教育長	福田　定観(昭和63年10月11日まで)
	〃		〃	杉村　　馨
調査事務局	〃	社会教育課	課　長	後藤　法泉(昭和62年度)
	〃		〃	筒井嘉寿彦
	〃		課長補佐	前川章太郎(昭和62年度)
	〃		〃	山本　一幸
	〃		主　任	清水　克章(昭和62年度)
	〃		〃	中嶌　正寿(昭和62年度)
	〃		〃	藤原　幸子
	〃		主　事	池田　　仁
調査担当	〃		技　師	中井　　均

調査補助員　中川和哉(現京都府埋蔵文化財調査研究センター)　細川英雄
井関　敏　宮川哲郎(現甲良町教育委員会)　小林正伸

調査作業員　川森茂子　川森かづ子

4．出土遺物の整理、復元、実測に関しては上記補助員、作業員全員でおこなった。

5．遺物の写真撮影については、寿福滋氏を煩した。

6．本書の執筆、編集は中井均がおこなった。

目　　次

序　文

例　言

第Ⅰ章　調査に至る経過 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 2

第Ⅲ章　調査の経過 …… 5

第Ⅳ章　調査の成果 …… 6

　第１節　検出遺構 …… 6

　第２節　出土遺物 …… 10

第Ⅴ章　調査のまとめ …… 28

挿　図　目　次

fig 1　調査地周辺図 …… 3

fig 2　トレンチ配置図 …… 4～5

fig 3　２トレンチ遺構実測図 …… 6

fig 4　３－２トレンチ遺構実測図 …… 7

fig 5　３－２トレンチＳＫ０２遺物出土状況 …… 8

fig 6　４トレンチ遺構実測図 …… 9

fig 7　３．４トレンチ南壁土層断面図 …… 10～11

fig 8　出土遺物(古式土師器)実測図 …… 12

fig 9　出土遺物(古式土師器)実測図 …… 13

fig 10　出土遺物(古式土師器)実測図 …… 14

fig 11　出土遺物(古式土師器)実測図 …… 16

fig 12　出土遺物(古式土師器)実測図 …… 17

fig 13　出土遺物(古式土師器)実測図 …… 18

fig 14　出土遺物(古式土師器)実測図 …… 20

fig 15　出土遺物(古式土師器)実測図 …… 21

fig 16　出土遺物(古式土師器)実測図…… 22
fig 17　出土遺物(古式土師器・須恵器)実測図…… 23
fig 18　出土遺物(木製品)実測図…… 24
fig 19　出土遺物(木製品)実測図…… 25
fig 20　出土遺物(石器)実測図…… 27

図 版 目 次

PL. 1 遺跡 (1) 調査地全景（西から）
(2) 調査風景
PL. 2 遺跡 (1) 調査風景
(2) 4トレンチ遺物出土状況
PL. 3 遺跡 (1) 4トレンチ遺物出土状況
(2) 4トレンチ遺物出土状況
PL. 4 遺跡 (1) 3－2トレンチ遺物出土状況
(2) 3－2トレンチ遺物出土状況
PL. 5 遺跡 (1) 3－2トレンチ遺物出土状況
(2) 3－2トレンチ獣歯出土状況
PL. 6 遺跡 (1) 4トレンチ遺構（西から）
(2) 4トレンチ南壁土層断面
PL. 7 遺跡 (1) 3－2トレンチ遺構（西から）
(2) 3－2トレンチ遺構(北西から)
PL. 8 遺跡 (1) 3－2トレンチＳＫ０２遺物出土状況
(2) 3－2トレンチ Ｐ２１
PL. 9 遺物 土師器
PL.10 遺物 土師器
PL.11 遺物 土師器
PL.12 遺物 土師器
(22：３－２トレンチＳＫ０２)
PL.13 遺物 土師器
PL.14 遺物 土師器
PL.15 遺物 土師器
PL.16 遺物 土師器
PL.17 遺物 土師器
PL.18 遺物 土師器
PL.19 遺物 土師器
PL.20 遺物 土師器
PL.21 遺物 土師器
PL.22 遺物 土師器、須恵器
PL.23 遺物 (1) 木製品
(2) 同上裏面
PL.24 遺物 (1) 木製品
(2) 石器

第Ⅰ章　調査に至る経過

滋賀県坂田郡米原町中多良、上多良には周知の遺跡として、集落の西側に立花遺跡、筑摩佃遺跡が、集落の東側には中多良遺跡、本願寺遺跡が所在している。昭和62年度に県営かんがい排水路事業（天の川地区南幹線水路第８工区）が計画され、その工区内に中多良遺跡が含まれていた。

昭和62年10月、滋賀県農林部長より滋賀県教育委員会へ調査の依頼があった。県教育委員会は10月26日付け、滋教委文保第1792号で、この調査を米原町教育委員会に依頼してきた。米原町教育委員会はこの依頼に対して、11月12日付け米教委社発第277号で調査を実施する回答を県教育委員会に送付するとともに、文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘調査の通知を送付した。このような経過を経て、11月16日付で調査の委託契約を締結し、11月24日より12月11日までの間発掘調査を実施した。

調査の結果、当初の予想をうわまわる遺物が出土したため、昭和63年１月14日付け米教委社発第15号で調査経費の変更を依頼し、１月22日付けで委託変更契約を締結することとなった。

また出土遺物の整理、報告書刊行については、中多良遺跡の調査終了後、直ちに別件の調査があったため、年度内刊行は不可能であり、昭和62年12月18日付け、米教委社発第301号で、翌年度に改めて実施するよう依頼した。この結果、昭和63年４月１日より平成元年３月31日までの間、遺物整理、報告書作成をおこなうこととなり、４月１日付けで委託契約を締結した。

第II章　遺跡の位置と環境

今回調査を実施した地点は、米原町上多良と中多良の東側水田部分であった。上多良、中多良、下多良は、天野川が大きく南に迂回する南方にほぼ一列に点在しており、天野川が南下して流れていた段階での自然提防上に形成された集落と考えられる。

今回の調査地点は、周知の遺跡中多良遺跡の北限に相当する部分である。近年ほ場整備事業に伴い、調査地周辺では数個所発掘調査を実施している。ここではそれらの調査結果を中心に、調査地周辺の歴史的環境を見ていきたい。

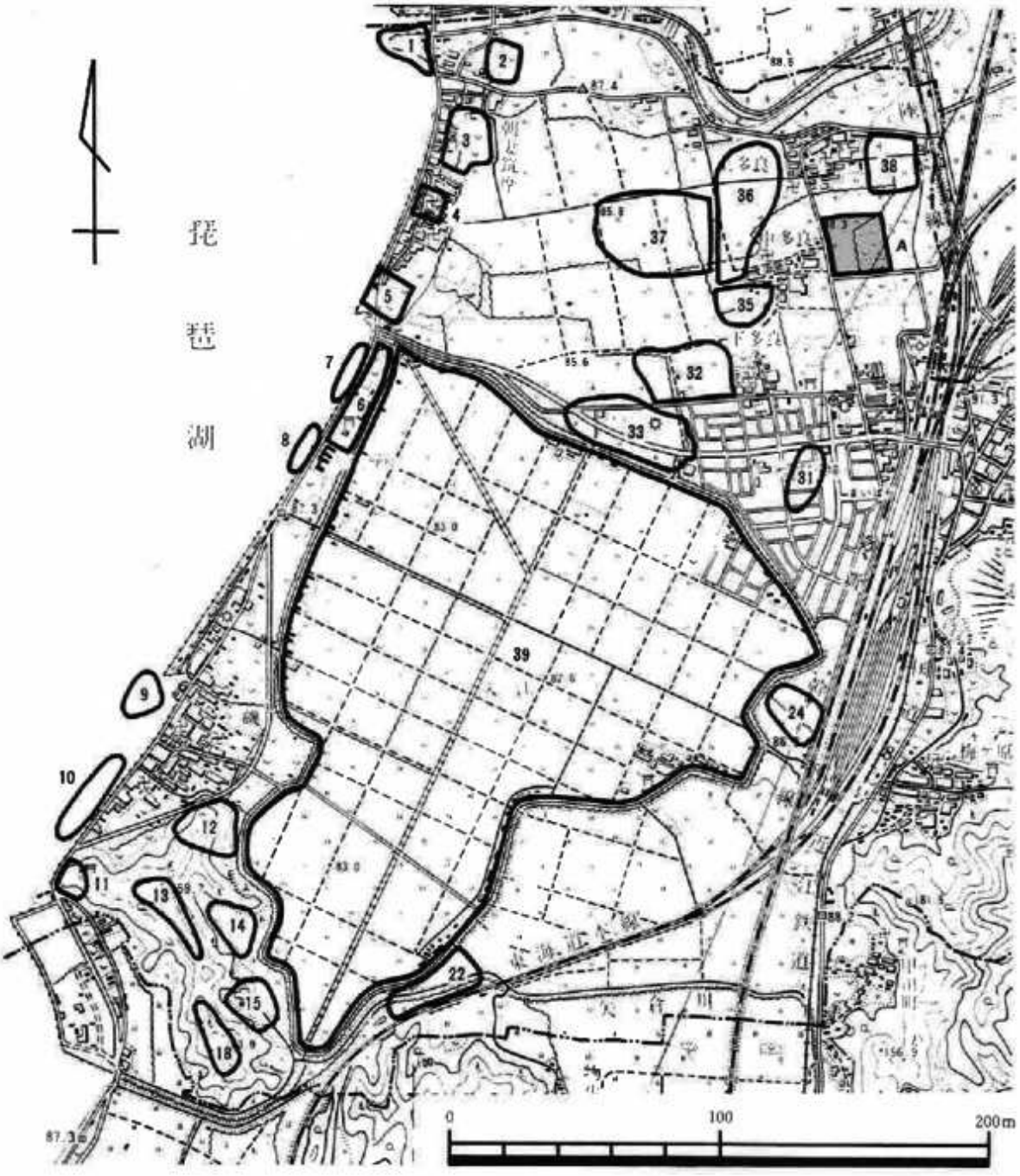
まず、今回調査を実施した中多良遺跡であるが、昭和62年度に県営ほ場整備事業に伴い調査がおこなわれている。調査地は今回の調査地の南方120ｍの地点で、付近では珍らしく水田より一段高く畑地となっており、調査に期待された。しかし調査の結果、表土・床土を除去すると、礫層が地表面下1.8ｍまで堆積しており、遺構、遺物共に確認されなかった。[1]

また昭和63年度の県営ほ場整備事業に伴い、今回調査を実施した地点の北100ｍの地点で、本願寺遺跡の調査をおこなった。ここでは古墳時代の遺構と遺物が多量に検出されており、今回調査を実施した地点と同一遺跡と位置付けられる可能性が高いと考えよう。[2]

このように、上多良、中多良、下多良の集落の東側に展開する水田地帯のうち、ほぼ北半分は古墳時代の集落であった。

次に三集落をはさんで西側の水田地帯に目を向けると、上多良の西隣接地には６世紀初頭の大乾古墳群が位置する。封土は既に削平されてしまっているが、国道８号線米原バイパス建設に伴う調査で、数基の周濠が検出された。このうち１号墳は直径22ｍを測る円墳で、周濠内からは円筒埴輪、形象埴輪が出土している。天野川からわずかに50ｍしか離れておらず、被葬者と河川は重要な関係にあったことを想像させる。また本願寺遺跡や中多良遺跡といった古墳時代集落の首長の奥津城の可能性も充分考えられる。[3]

さらに大乾古墳群の南方、上多良と中多良集落の間の西側には立花遺跡、筑摩佃遺跡が所在している。いづれも縄文時代から弥生時代にかけての遺跡で、筑摩佃遺跡では、縄文時代早期末の条痕文土器をはじめ、中期、晩期の土器が出土している。[4] 一方、



A．今回調査地
1．朝妻港跡遺跡
2．朝妻遺跡
3．朝妻城跡
4．法善寺遺跡
5．今江寺遺跡
6．筑摩御厨跡遺跡
7．筑摩湖岸遺跡
8．入江小学校前湖岸遺跡
9．磯湖底遺跡
10．磯湖岸遺跡
11．磯崎古墳群
12．磯山城遺跡
13．磯山城跡
14．堂谷遺跡
15．柚塚遺跡
18．虎ヶ城跡
22．入江内湖西野遺跡
24．米原駅西遺跡
31．米原駅前遺跡
32．下定使遺跡
33．中多良入江内湖周辺遺跡
35．蔵華寺遺跡
36．立花遺跡
37．筑摩佃遺跡
38．本願寺遺跡
39．入江内湖遺跡

（遺跡番号は米原町教育委員会発行「米原町内遺跡分布調査報告書」1988と一致する。）

fig1．調査地周辺図

立花遺跡で注目されるのは、弥生時代前期の土器の出土である。出土した土器は前期中段階のもので、長浜市川崎遺跡とともに、坂田郡内における弥生時代最古の集落であった。立花遺跡の主体は続く弥生時代中期で、数多くの外来系土器が出土しているほか、玉造り関係の遺物も出土している。[5]

中多良、下多良の西側には、薗華寺遺跡、下定使遺跡が所在している。薗華寺遺跡は昭和61年度県営ほ場整備事業に伴い、発掘調査を実施している。ここでは奈良時代末と古墳時代の上下二層の包含層が検出されている。[6]

また下定使遺跡も同様に奈良時代末と古墳時代の二時期の生活面が検出されている。奈良時代末の遺物のなかで、「飯」・「穴太国?」・「富」などの墨書土器や、木履の出土は、下定使遺跡の性格が一般農耕集落ではなく、官衙的施設ではないかと考えられるものであろう。[7]

このように、上多良、中多良、下多良集落の両側に展開する水田地帯は、縄文時代から奈良時代にかけての集落が点在していたのである。おそらく現集落が成立するのは平安時代以降のことであろうと考えられる。

奈良時代以降の調査地周辺の状況は不明に近い。唯一、嘉吉元年（1441）に作成された、『興福寺官務牒疏』によれば

「園華寺 在多良、僧房六宇、本尊弥勒大士、伊吹山三宗上人開基、

本願寺在同郡富永荘、僧房三宇、

行基菩薩開基、天平元年也、本尊八尺地蔵菩薩」

とあり、興福寺の末寺として、上多良に本願寺、中多良に宇賀野（坂田郡近江町）の歓喜光寺の別院として、園華寺という寺院が存在していたようで、薗華寺遺跡からは1点のみであるが、布目瓦が出土しており、[8] 周辺に寺院跡が眠っている可能性もある。

注 ① 米原町教育委員会『立花遺跡発掘調査報告書』 1988

② 〃 『本願寺遺跡発掘調査報告書』 1989

③ 〃 『一般国道8号（米原バイパス）関連遺跡試掘調査報告書』 1989

④ 〃 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』 1987

⑤ 前掲注①

⑥ 前掲注④

⑦ 前掲注③

⑧ 前掲注④

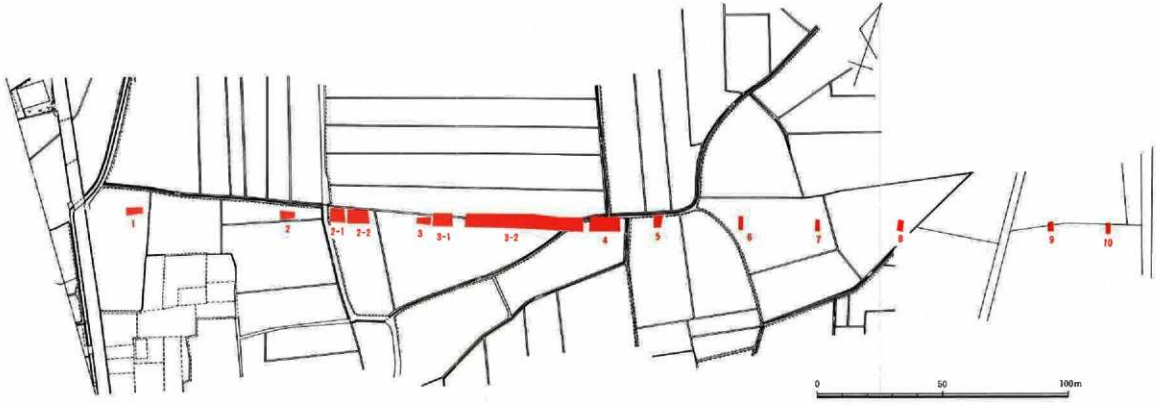


fig2. トレンチ配置図

第Ⅲ章　調査の経過

今回計画されたかんがい排水路は、中多良遺跡の東西を一直線に横断することになっていた。その延長は350ｍで、排水管は地表下1.8ｍに埋設されることにより、水路線内全域が調査の対象となった。

調査方法について、米原町教育委員会と滋賀県長浜県事務所土地改良課と協議をおこなった結果、水路線全域に遺構、遺物包含層が広がっているか否かが不明なため、とりあえず、４×５ｍ程度のトレンチを部分的に設定し、遺構、遺物包含層が確認されたトレンチについては拡張していくこととした。この結果、調査区内におけるトレンチの設定は合計14ヶ所となった。

調査は地表面より遺物包含層まで0.4㎥のバックホウで掘削をおこない、以後手掘りによった。いづれのトレンチも湧水が激しく、調査ははかどらなかった。また最も遺物が多く出土した３－２トレンチでは、真上に高圧線が走っており、関西電力の立会のもと、調査は慎重を極めた。

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　検出遺構

１．　１トレンチ

１トレンチは耕土直下に礫層が堆積していた。念のため、排水管の入る地表下1.8ｍまで掘削をおこなったが、湧水の激しい礫層のみの単一層であった。おそらく天野川の氾濫原であったと考えられる。なお、この礫層中から土器小片が２点出土している。いずれも磨滅が激しいことから、トレンチ北東部に展開する遺跡より流されてきたものと考えられる。

２．　２トレンチ

１トレンチ同様、耕土下は湧水の激しい礫層が堆積していた。ところが２トレンチではこの礫層が薄くなり、60cmほどの厚さとなっていた。この礫層を除去すると、黒色粘土層となり、溝が検出された。黒色粘土層中には少量の土器片が包含されていた。小片であり、正確な年代は確定しえないが、布留式併行とみてまちがいあるまい。

この包含層（黒色粘土層）は厚さ60cmで、これを除去すると、青灰色粘土層となる。この層序は遺構、遺物を検出した３トレンチ、４トレンチと同様であることにより、２トレンチで検出した青灰色粘土層も遺構面とみられる。

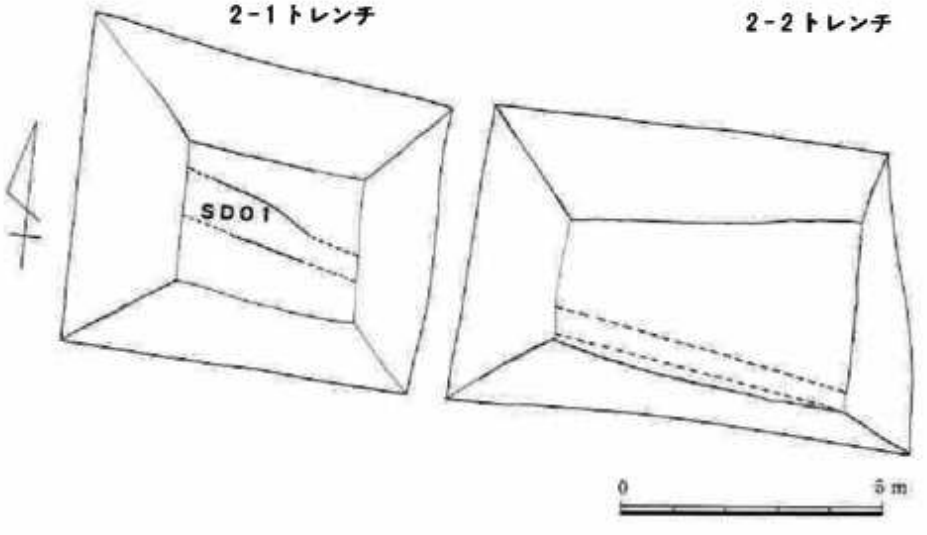


fig3．２トレンチ遺構実測図

ＳＤ０１　黒色粘土層上面で検出した溝ＳＤ０１は東西に流れるもので、幅80cm、深さ20cmを測る。埋土は礫層のみで、出土遺物は認められなかった。黒色粘土層が古墳時代前期後半の包含層と考えられることより、ＳＤ０１はそれ以後形成されたものである。

３．　３トレンチ

２トレンチで認められた遺物包含層の延長を確認するため設定した。このトレンチでは遺構、遺物が出土したため、順次拡張をおこない、３、３－１、３－２トレンチを設けることとなった。

層序は、１トレンチ、２トレンチ同様、耕土直下に礫層が堆積していた。礫層は２トレンチよりさらに薄くなり、３－２トレンチでは消滅する。礫層下には新たに、灰色砂質粘土が堆積し、その下に黒灰色粘土、黒色粘土が堆積しており、この層中に土器が多量に包含されていた。包含層を除去すると、青灰色粘土となり、遺構が検出された。遺構の大半は直径20cm前後のピットであり、柱間の通るものはなく、その性格は不明である。

ＳＢ０１　３－２トレンチのほぼ中央で検出したもので、多数検出したピット群のうち、唯一柱間の通るもので３間（2.0ｍ）×１間（0.65ｍ）以上の規模となる。ピット内からの出土遺物は認められなかった。

ＳＫ０２　ＳＢ０１の西側で検出した土坑で、トレンチ南壁に位置する。形状はトレンチの外側に延びるため不明である。トレンチ断面の観察では、東西1.0ｍ、深さ８cmを測る。土坑内に小ピット２ヶ所を伴う。埋土中からは古式土師器(22)が出土した。

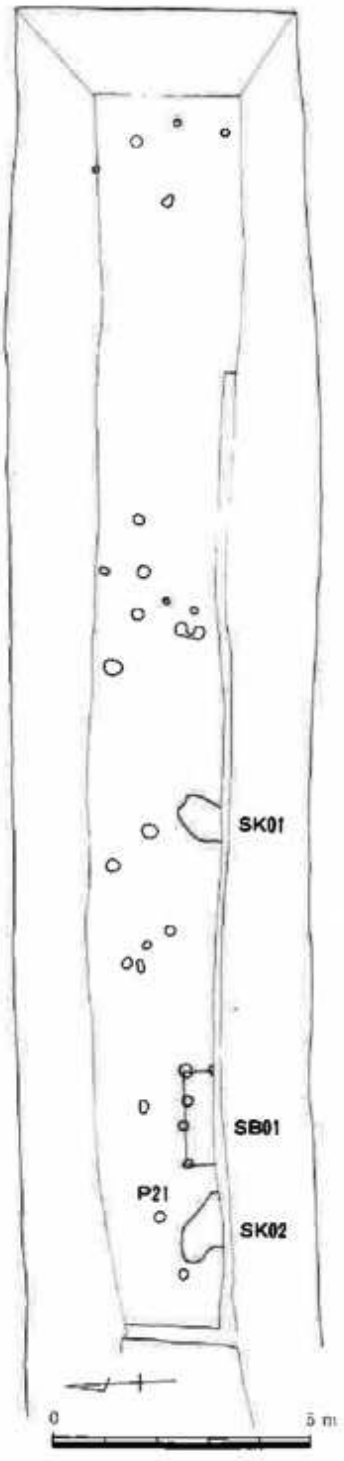


fig4. 3-2トレンチ遺構実測図

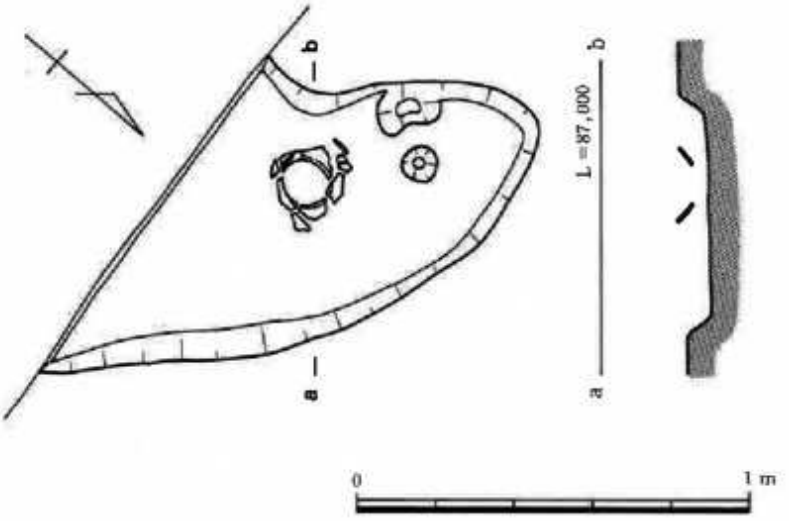


fig5. 3-2トレンチＳＫ02遺物出土状況

Ｐ２１　土坑ＳＫ０２の北側で検出したピットで直径20cm、深さ20cmを測る。ピット内には４～８cm大の礫がぎっしり詰められていた。

４．　４トレンチ

３トレンチで認められた遺構、遺物包含層の延長をさらに確認するため、４トレンチを設定した。層序は３トレンチと同一であった。遺構面で検出した遺構はピットが８個のみであった。いずれも直径20cm前後の小ピットであり、柱間の通るものはなく、またピット内からの出土遺物も皆無であり、性格、時期は不明である。

なお４トレンチの東端部付近で層序が一変する。３－２トレンチで消滅した礫層が４トレンチ東端部で耕土直下に再び現われはじめる。しかも急激に傾斜を持って東側へ厚く堆積しており、遺物包含層、遺構がなくなっている。これらの状況より、４トレンチが遺跡の東限と考えられる。

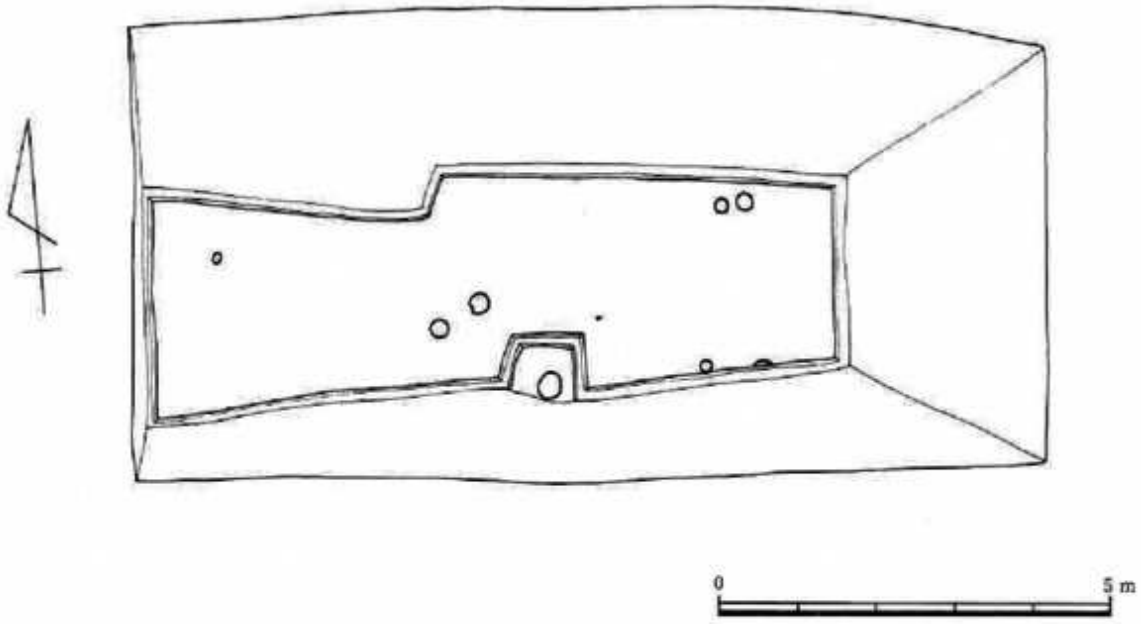


fig6．4トレンチ遺構実測図

5．　5～10トレンチ

4トレンチ以東の水路線上に5～10の計6ヶ所のトレンチを設定した。いずれのトレンチも耕土直下に礫層の堆積が観察された。念のため、排管の埋設される地表下1.8mまで掘削をおこなったが礫層のみの堆積であった。

このような状況から4トレンチ東端で確認された礫層が4トレンチ以東に広がることが明らかとなり、中多良遺跡の範囲が明確になった。おそらく5～10トレンチ部分も1トレンチ同様、天野川の氾濫原であったと考えられる。

第２節　出土遺物

今回出土した遺物は３－２トレンチＳＫ０２出土土師器以外は、３，３－１，３－２，４トレンチの黒灰色粘土、黒色粘土（包含層）層中からの出土であった。ここでは遺構出土遺物の報告につづき、以下はトレンチ別とせず、一括して包含層出土遺物として報告する。

１．遺構出土遺物

・３－２トレンチＳＫ０２(fig10)

ＳＫ０２からは古式土師器甕(22)が出土した。土坑内にふせた状態で、体部以下は失なわれていた。口縁は体部より「く」の字状に外反するが、全体に丸味を帯びている。外面口縁部はナデ、体部は縦方向のハケを施す。内面口縁部は横方向のハケ、体部はケヌリを施している。

２．包含層出土遺物

(1) 土師器

・甕(fig８，９，10,11,12)

(１)～(11)、(14)、(31)は古式土師器の甕で、口縁部が体部より大きく「く」の字状に外反している。体部は(９)、(11)、(14)のように球状となる。口縁端部内面には段を有している。調整は外面口縁部をナデ、体部をハケとしている。内面口縁部はナデ、体部はケズリを施している。このような形状や調整より、これらの甕は布留式土師器に相当するものである。

(10)は口縁の立ちあがりが直に近くなっている。しかし口縁端部内面に段を有することより、布留式土師器に併行するものであろう。

(12)、(13)、(15)、(16)、(26)は口縁部がいわゆる「受け口状口縁」と呼ばれるものである。(13)、(15)の口縁外面は「く」の字状が外反しつつ、受け口状口縁となっているが、(15)、(16)、(26)、(34)は体部より直立する受け口状口縁となっている。(12)は外面体部六条の原体からなるハケを綾杉状に施したのち、同じ原体によって２段に横ハケを施している。内面は頸部に横ハケを残し、体部はヨコハケの後指頭によって、横ハケをなで消した痕跡が明瞭に残っている。口縁はナデ仕上げとなる。(13)、(15)、(16)、(26)、(34)は外面体部をハケ、内面体部をナデとし、口縁部はナデ仕上げとなる。これらの受口状口縁甕は前出の布留式段階の甕とほぼ併行するものと考えられよう。なお(12)、(15)、(26)の小型のものは胎土中に多くの雲母が認められる。

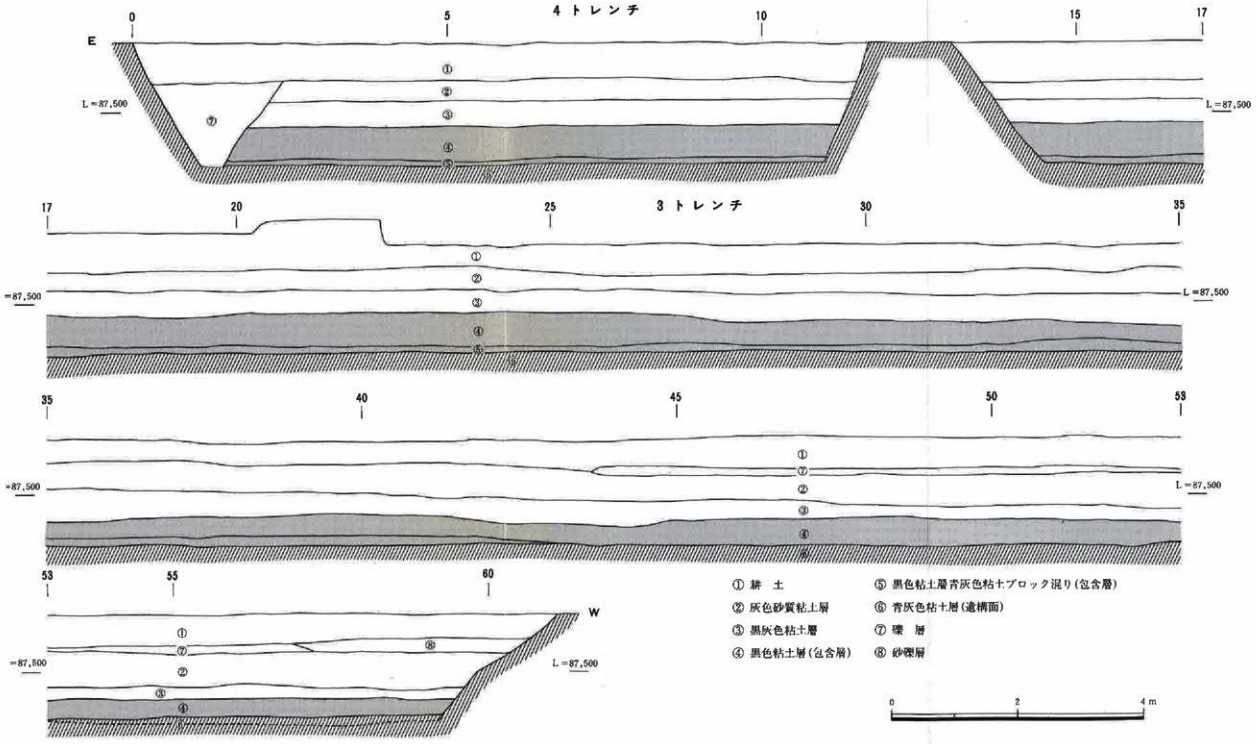


fig7. 3.4トレンチ南壁土層断面図

(17)は小型の甕で、丸味を帯びた「く」の字状の口縁となる。口縁部に輪づみの痕跡が残る。器壁は厚く８㎜を測る。

(18)は体部から「く」の字状に口縁部が立ちあがるプロポーションとなる。ところが口縁内面は受け口状に屈曲している。調整は内外面ともにナデを施し、体部に横位のハケが認められる。器壁は厚く、８㎜を測る。

(19)は「く」の字に外反する口縁を有するもので、外面体部は全面に斜位のハケを施し、口縁はナデとし、内面体部はナデ、口縁は横位のハケを施している。

(20)も(19)とほぼ同じ調整をとるが、体部から口縁にかけては直に近い状態で立ちあがっている。

(21)は(１)～(11)に認められる布留式の特徴を有するものである。しかし口縁はシャープな「く」の字にはならず、直に近い状態で立ちあがる。また外面体部のハケは粗く、いびつである。口縁端部内面の段も肥厚している。そして何よりも器壁が前述の布留式土器に比べて８㎜と厚い。

(23)は全体に指頭によるナデで調整をおこなっている。口縁と体部の稜も丸く不明瞭である。

(24)は体部より外反した口縁が、途中で直立する形状をなすもので、口縁端部は平坦面をもつ。外面は縦ハケの後ナデを施す。内面は横ハケの後ナデを施している。

(25)は(１)～(11)の布留式に似る小型の甕である。体部から口縁への屈曲は「く」の字となるが、シャープさに欠け、丸味を帯びる。口縁内面端部の段は斜位にならず、端部が肥厚して平坦面をもつようになる。

(27)は小型の甕で、外面体部全面に斜位のケズリを施す珍らしい調整をおこなっている。口縁部はナデを施す。内面は全面をナデで仕上げる。

(28)は(20)とほぼ同じプロポーションを示す。ナデは無造作で接合部の痕跡が残りハケも粗く、全体に粗製の土器である。

(29)も(28)とほぼ同じ器形、調整で、内面体部には輪づみの痕跡を残す、やはり粗製の土器である。

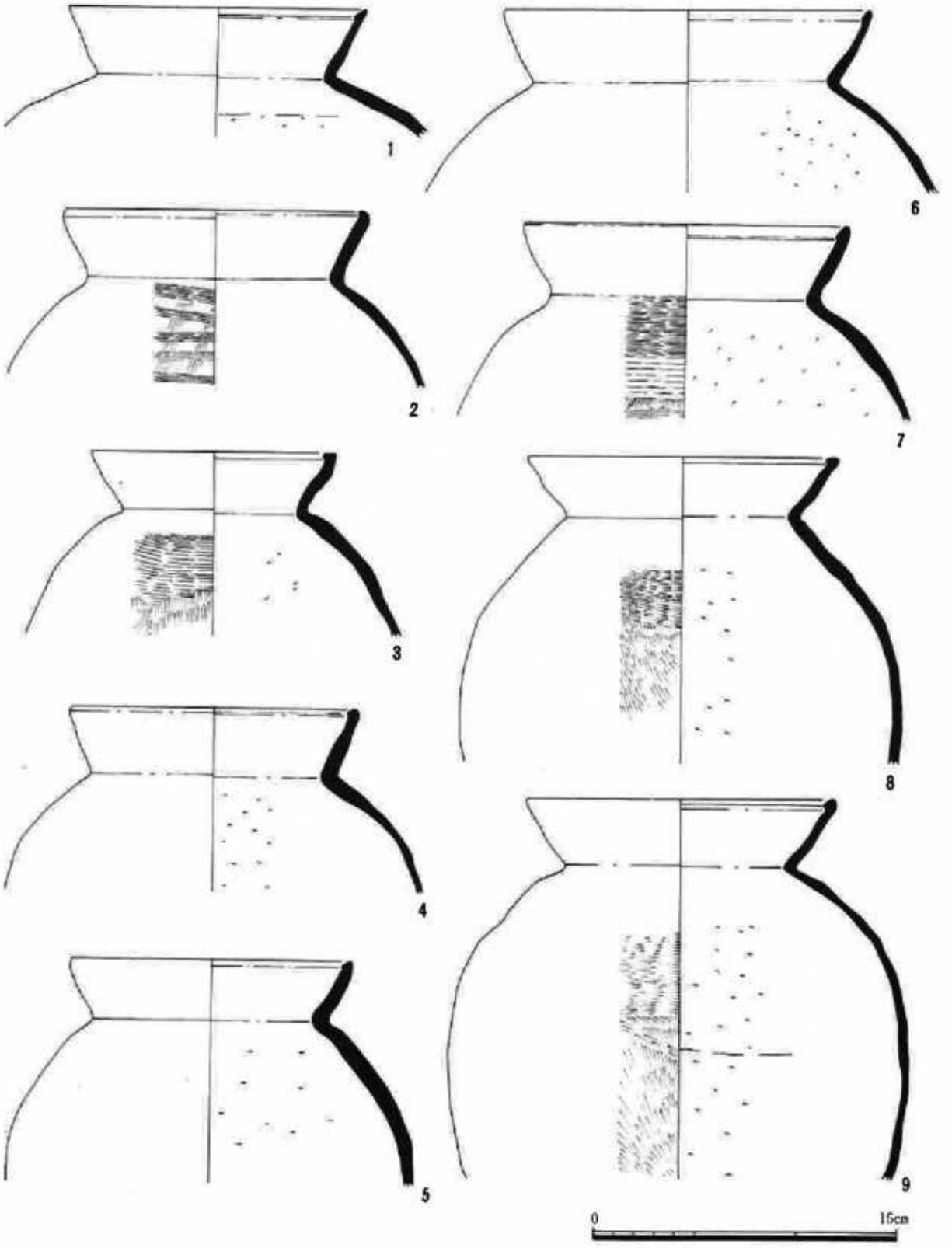


fig8. 出土遺物(古式土師器)実測図

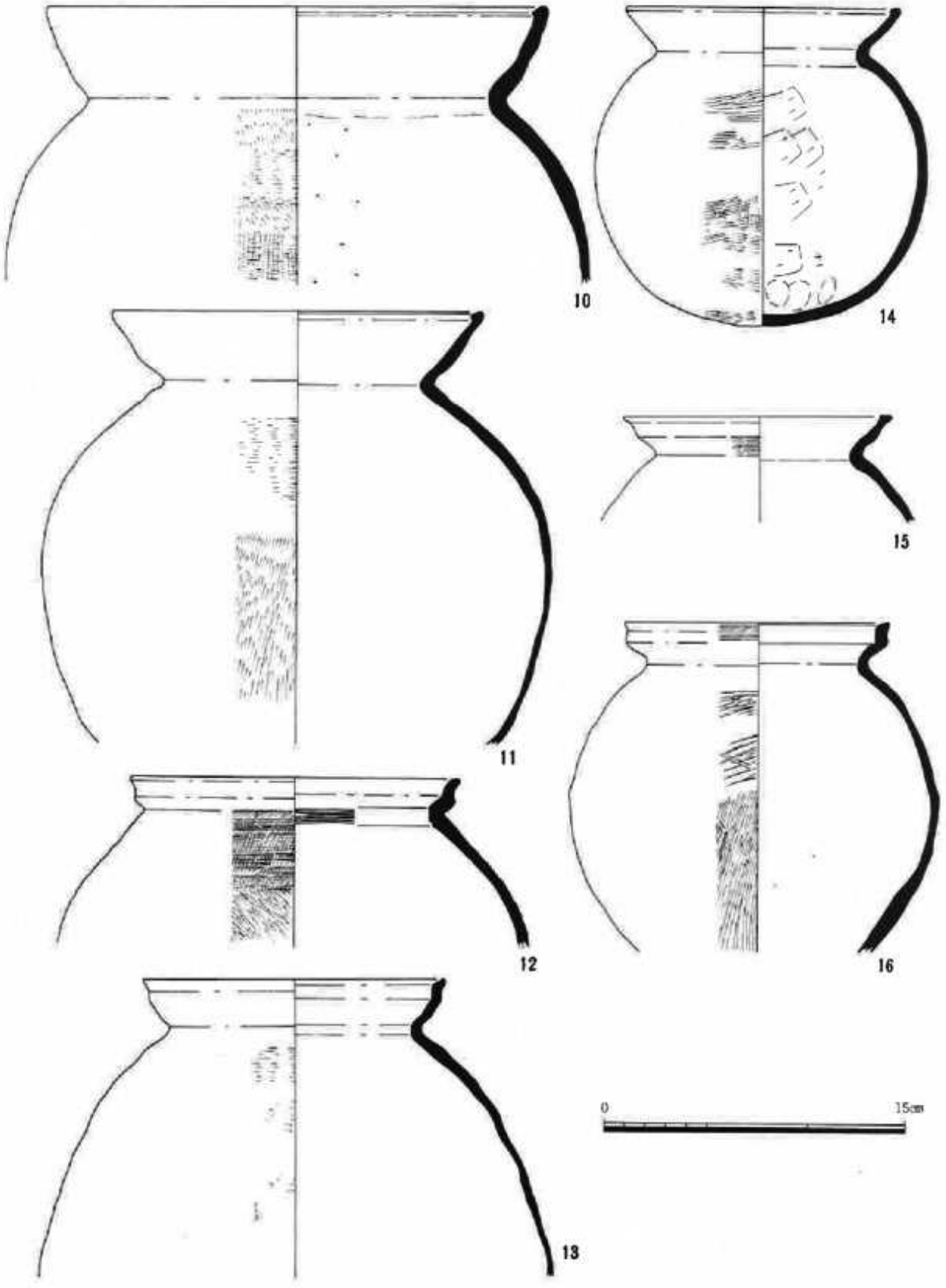


fig9. 出土遺物(古式土師器)実測図

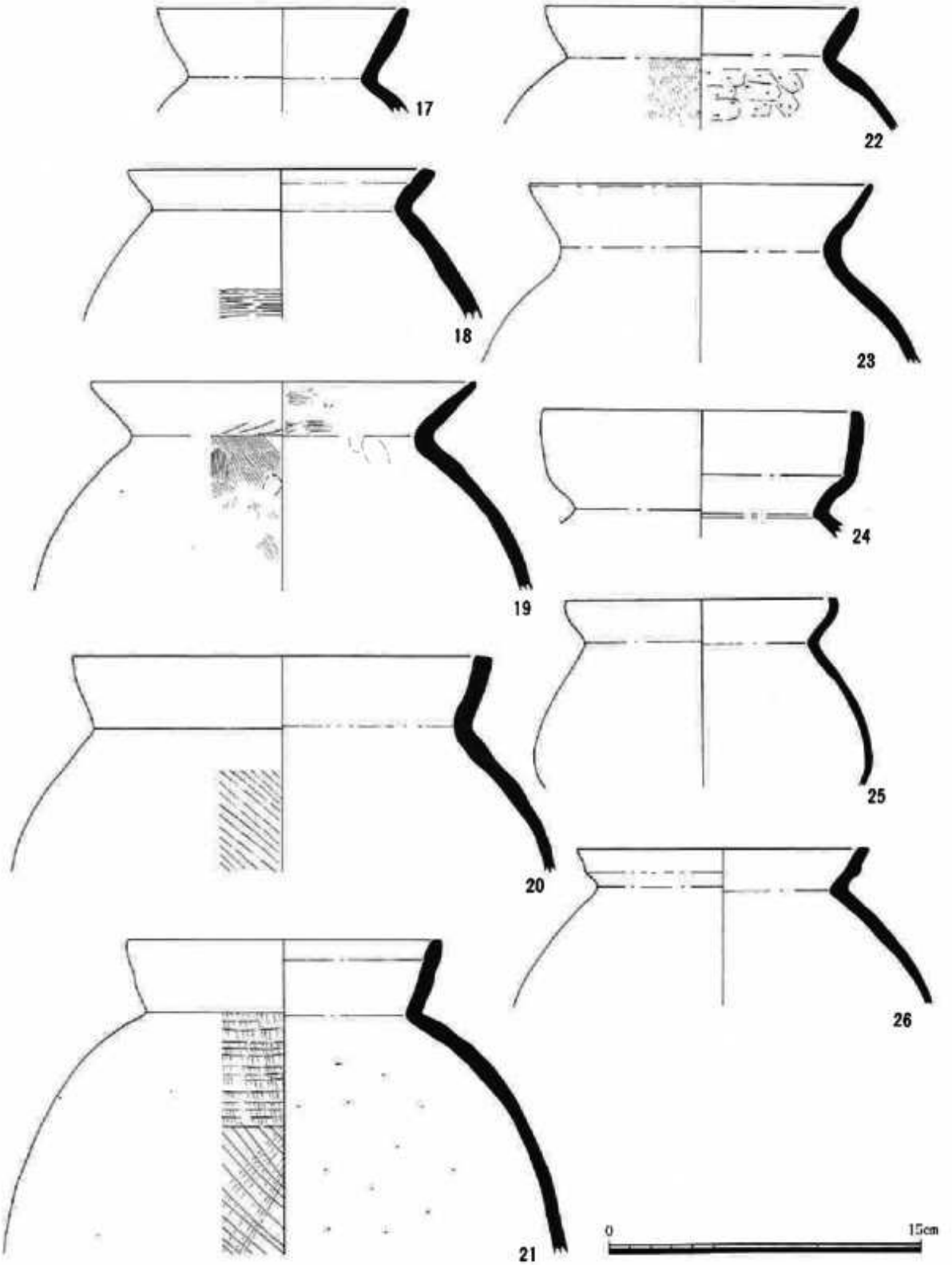


fig10. 出土遺物(古式土師器)実測図

(30)もやはり内面体部に輪づみ痕を残し、外面調整も不充分な粗製の土器である。

(32)は体部下方で最大径を有する、やや長胴の甕で、体部より口縁は丸味を帯びて直に近い状態で立ちあがる。外面口縁部はハケを施した後ナデ、体部は全面ハケを施す。内面口縁部は横ハケ、体部は口縁付近をナデ、それ以下をケズリとする。体部には輪づみ痕、口縁部には接合痕を残したままとしている。

(33)は口縁の直径27cmを測る大型の甕である。口縁は体部より外反したのちさらに屈曲して外反する複合口縁となる。外面体部はハケを施し、口縁はナデを施す。内面体部はケズリを施し、口縁はナデを施す。

(35)～(39)は脚付甕である。(35)はほぼ完形に近いもので、口縁はいわゆるS字状口縁となる。体部は肩部で最大径を有し、底部へ急速にしぼんでいき、脚部に至る。外面口縁部はナデ、体部は綾杉状にハケを施し、同一原体で肩部に横位にハケを一条施す。脚部は上半部までハケが施され、底部付近はナデとなる。内面は全体にナデが施されている。

(36)～(39)も甕の脚としたが、(36)(37)は高坏あるいは器台の脚の可能性もあろう。(36)は脚部に一対になる穿孔が2ヶ所穿たれている。(38)は(35)の脚とほぼ同一のものである。(39)はやや大型の脚で端部が内弯している。内外面ともにナデを施し、器壁は厚い。

・壺(fig13, 14)

(40)、(46)は広口壺の口縁部と考えられるものである。

(41)は短かく外反した口縁が屈曲し直立に近い角度で再度外反する口縁を有する広口壺である。口縁端部内面に段を有し肥厚している。胎土中に多くの雲母が認められる。

(42)は複合口縁となる広口壺と考えられる。外面ナデの後縦位にヘラ磨きを施している。

(43)、(44)、(48)は壺の体部である。

(45)は外反した「く」の字状口縁が端部付近で屈曲して直に立ちあがる〝受け口状口縁〟を模した広口壺である。内外面ともにナデを施している。

(47)は(45)の小型である。ただし口縁部の屈曲はほぼ口縁の中央から始まっている。

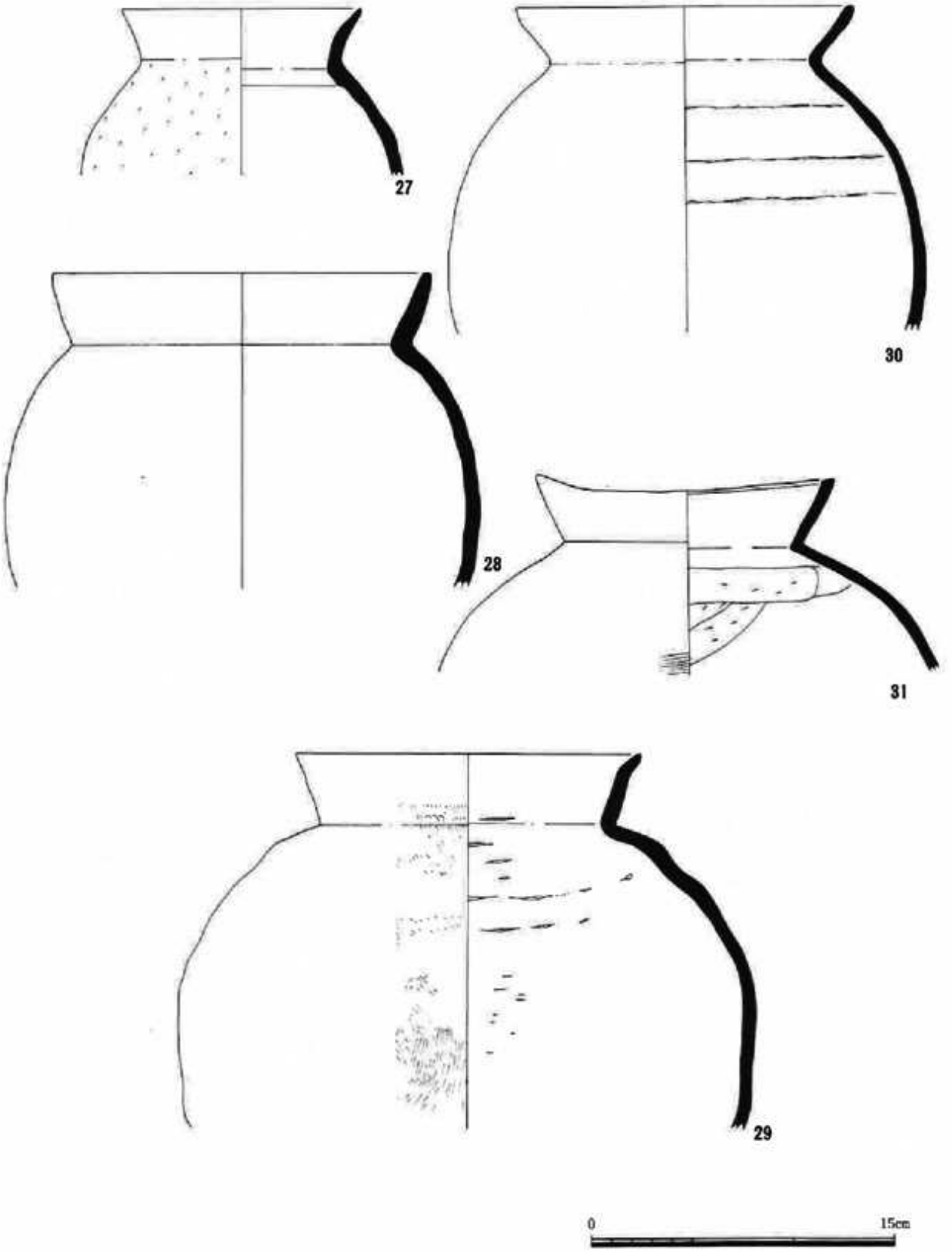


fig11. 出土遺物(古式土師器)実測図

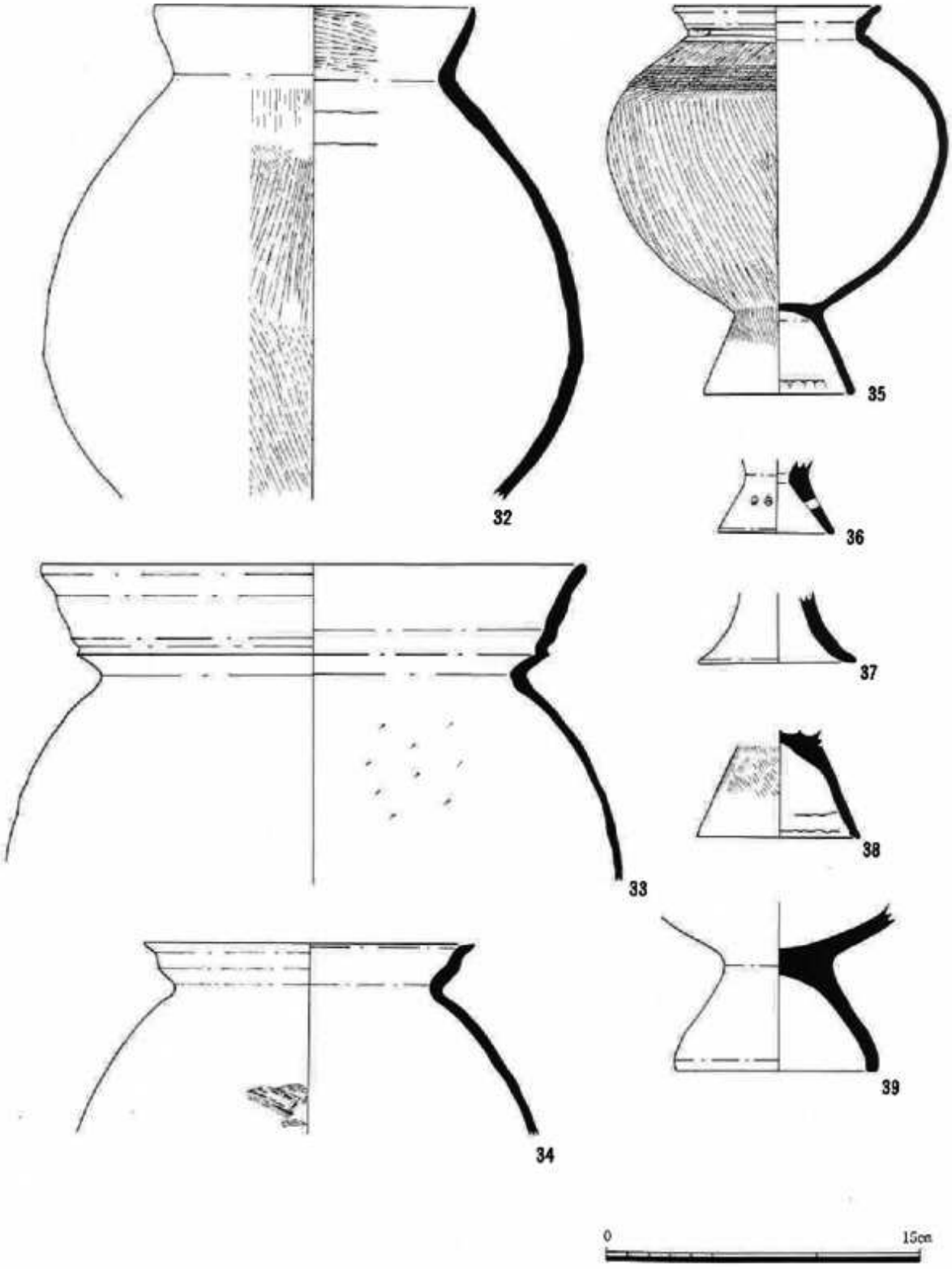


fig12. 出土遺物(古式土師器)実測図

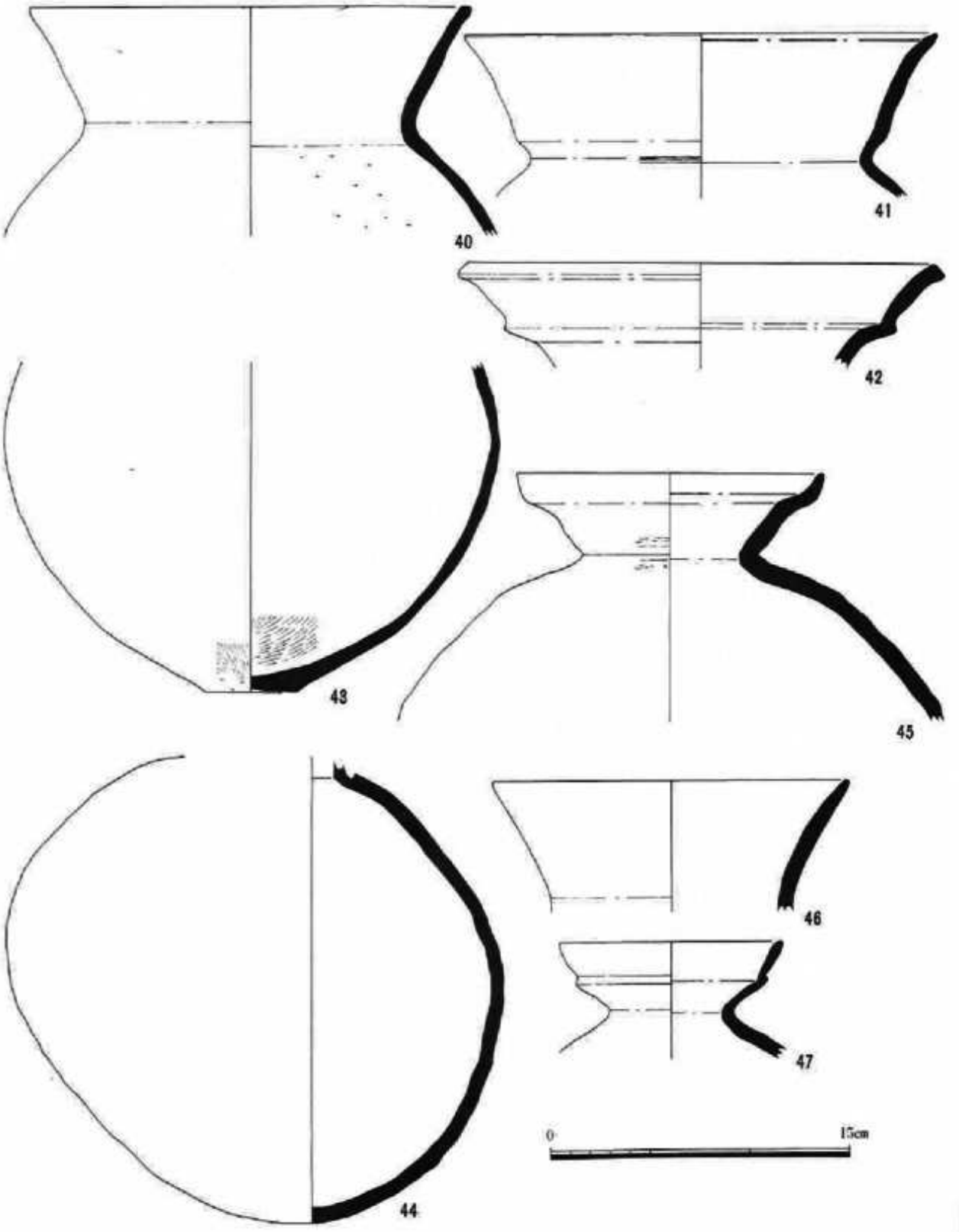


fig13. 出土遺物(古式土師器)実測図

・小形丸底壺(fig14)

(49)～(60)はいわゆる小形丸底壺と呼ばれるもので、(60)のみは器形からおそらく小形の甕になるものと考えられる。(49)～(59)は口縁部が器高の2分の1またはそれ以下となり、球胴となっている。外面体部はハケとし、内面はケズリを施す。ただし(53)、(58)、(59)は内面粗い指ナデとなる。(55)は体部に穿孔が認められる。

・鉢(fig15)

(61)は単縁「く」の字状口縁となる鉢である。

・器台(fig15)

(62)、(64)～(70)は中空になる器台で、受部は小さく丸い。ただし(65)は受部が端部で直に立ちあがりを示す。(63)、(71)、(72)は受部と脚部が塞がれているもので、(63)のプロポーションは他の中空の器台と同様である。(71)、(72)は受部の深い器台と考えられる。

・高坏(fig15, 16)

(73)～(75)は坏底部外面に明瞭な稜線のめぐる高坏で、外面ハケ、内面坏部もハケとなり、脚部内面はケズリとなる。脚部に透しは認められないが、(75)は脚底部開ききった個所に透しを設けている。

(76)、(78)は坏底部に擬口縁をつくり、外面に明瞭な段をなしている。

(77)は脚部より緩やかにたち上がる坏部となるものである。

(79)～(92)は高坏の脚部で、(90)、(92)を除くと脚部は円柱に近く、端部付近で大きく開き、その境界に明瞭な稜線が認められる。(90)は脚部が「ハ」の字状となるもので、(92)は端部が内弯気味に丸味を帯びるものである。透しは(85)、(88)、(92)のみに認められる。

・手焙り形土器(fig17)

(93)は手焙り形土器の蔵部に相当すると見られる土器片である。外面にヘラ描きの文様が施されている。文様の構成は幾何学文様と両手をひろげた人物状の生物が描かれている。

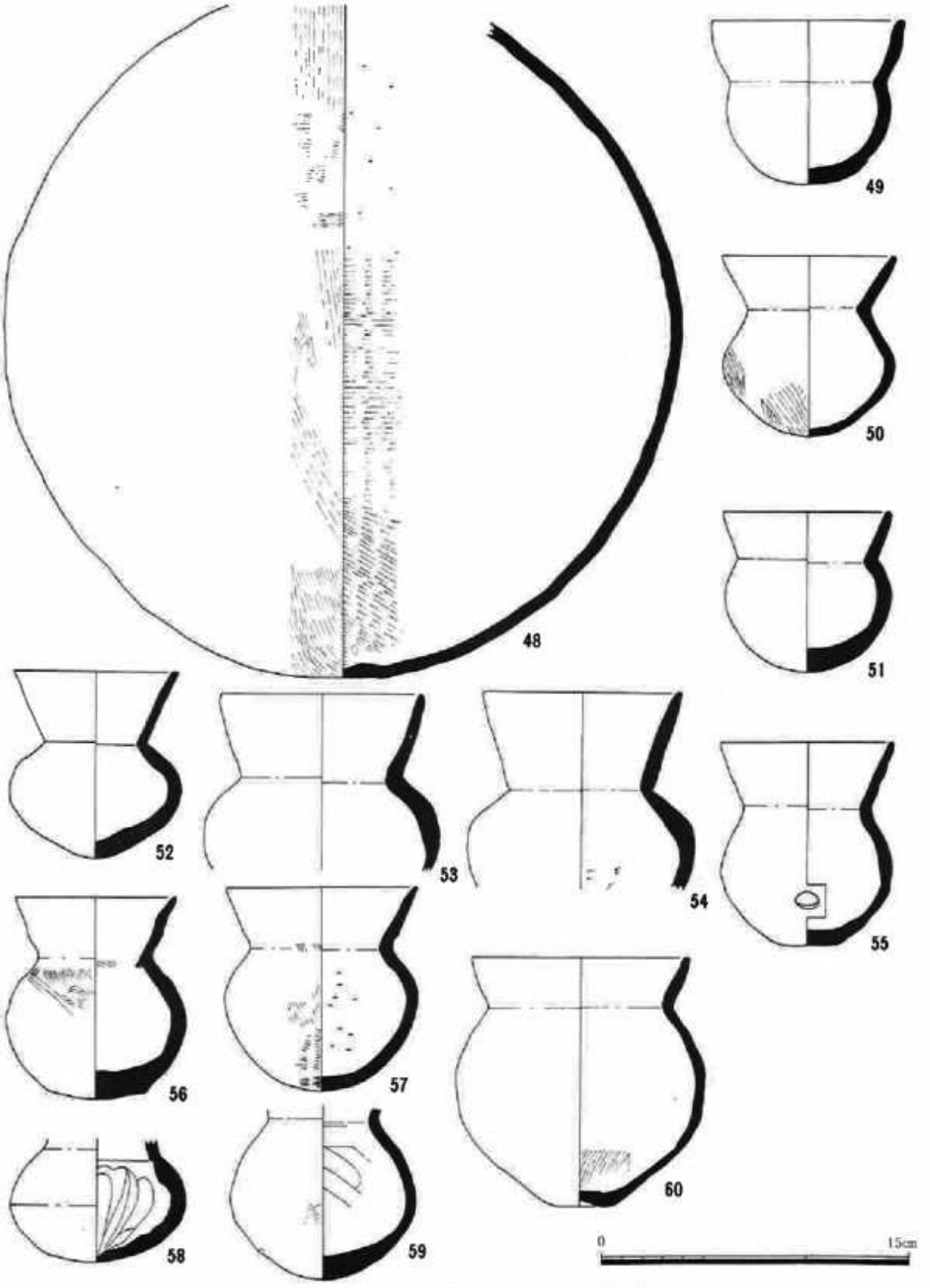


fig14. 出土遺物(古式土師器)実測図

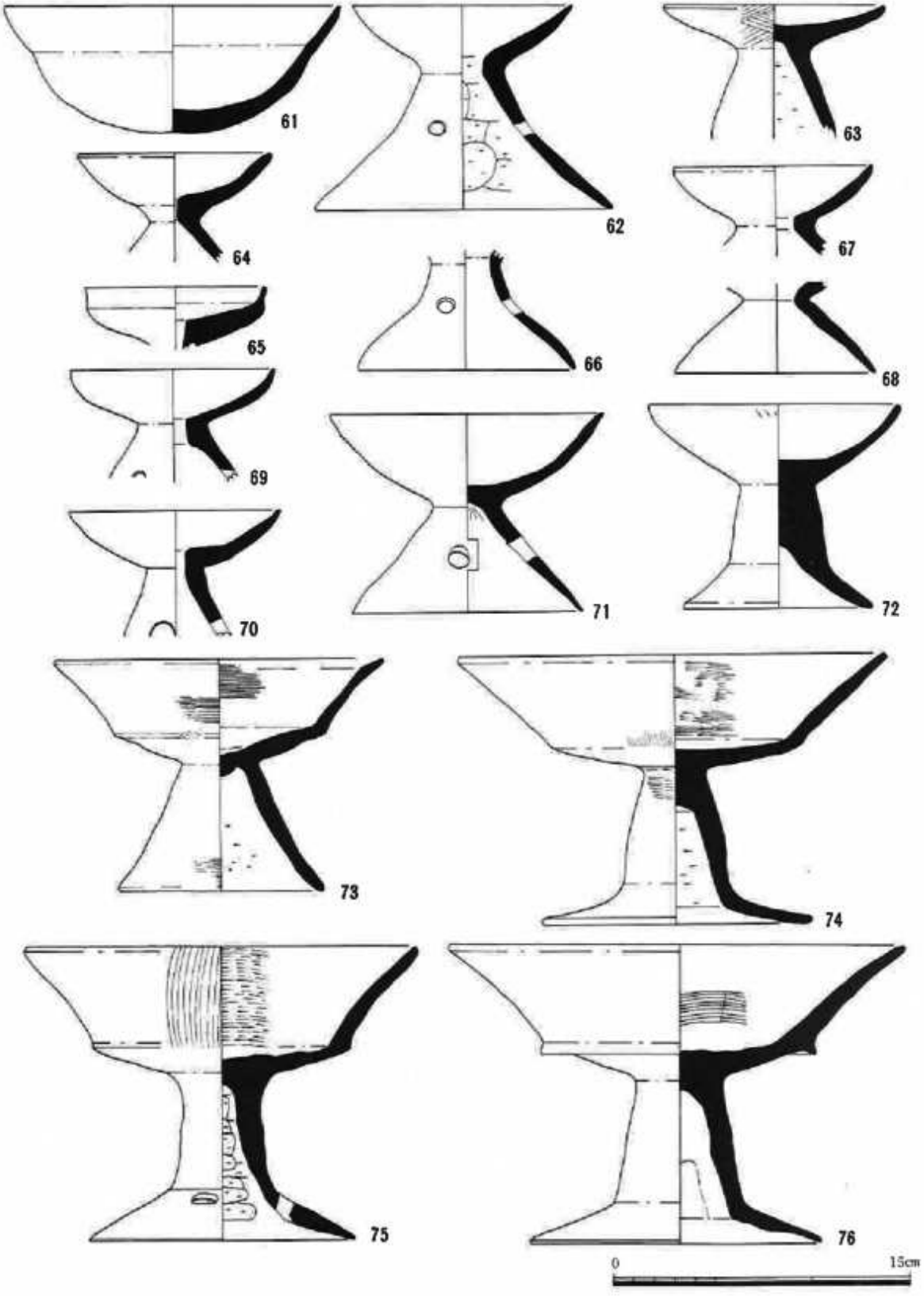


fig15. 出土遺物(古式土師器)実測図

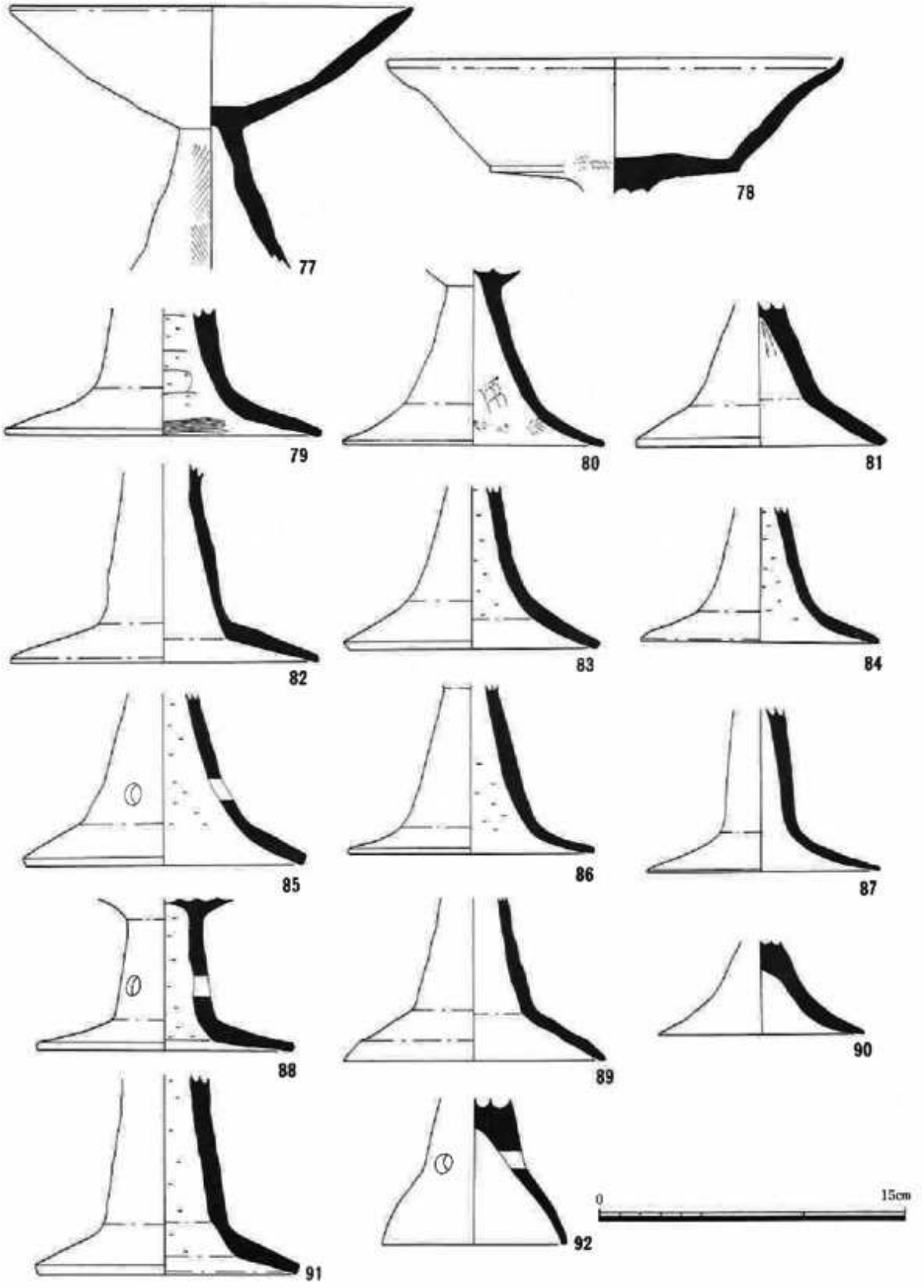


fig16. 出土遺物(古式土師器)実測図

(2) 須恵器

・坏蓋(fig17)

須恵器の出土量は破片も含めてほとんどなく、図示し得るのは3点のみであった。(94)、(95)は坏蓋である。(94)は体部が内弯する特異な形状を有している。(95)は体部と天井部の稜がすでに明瞭でなくなっている。陶邑古窯址群ＴＫ１０に相当するものと考えられる。

・甑(fig17)

(96)は小型の甑で、胴部に円孔を穿ち、波状文を施している。

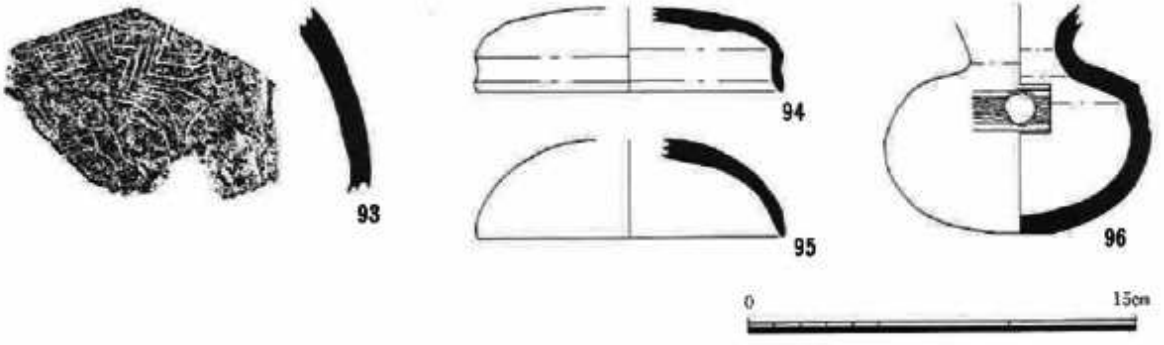


fig17. 出土遺物(古式土師器・須恵器)実測図

(3) 木製品

・下駄(fig18, 19)

(97)は台板が楕円形とならず、隅をカットした方形状をなす。鼻緒孔は後歯の前方に円形で斜位に穿たれている。半分以上残存しているが前ツボは認められず、かなり左側に偏っていたと考えられる。歯は削り出して作られ、前歯は台板端部に位置している。

(98)の台板は小判形の形状をなしている。鼻緒孔は方形で後歯の前方に垂直方向に穿たれている。前ツボはほぼ中央に方形で前歯の前方に垂直方向に穿たれている。ただし鼻緒孔の位置がかなり内側に位置しており、前ツボとの距離から考えると、足に比べて台板がかなり大きいと考えられる。歯は削り出してつくられ、前歯、後歯ともに外側方向は垂直に削り出され、内側方向には斜位に削り出されている。

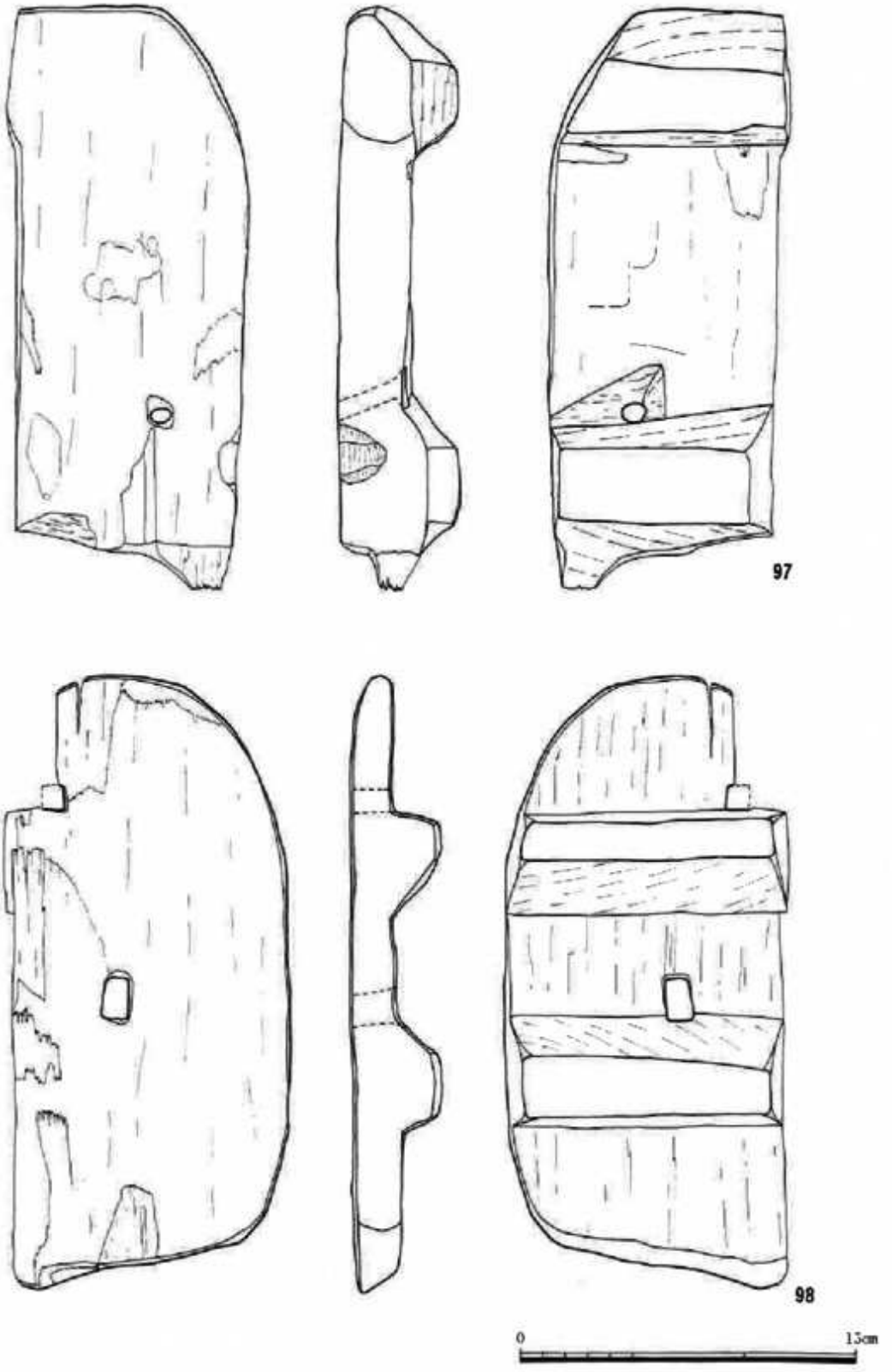


fig18. 出土遺物(木製品)実測図

(99)は長細い小判形の台板の形態を有する。鼻緒孔は円形で垂直に後歯の前方に穿たれている。前ツボはほぼ台板の中央に位置し、円形で垂直に穿つが、その位置は前歯の後方となっている。これは前歯の位置が台板端部と同位置にあるためである。歯は削り出して作られている。

・曲物(fig19)

(100)は曲物の底部である。直径18.2cm、厚さ0.6cmを測る。側面に釘穴は認められない。表面には無数の刃物傷が認められる。

・檜扇(fig19)

(101)は檜扇の骨と考えられるもので、全長34.8cm、最大幅3.9cm、厚さ0.5cmを測る。下方に要の孔が円形に穿たれている。時代は不明。

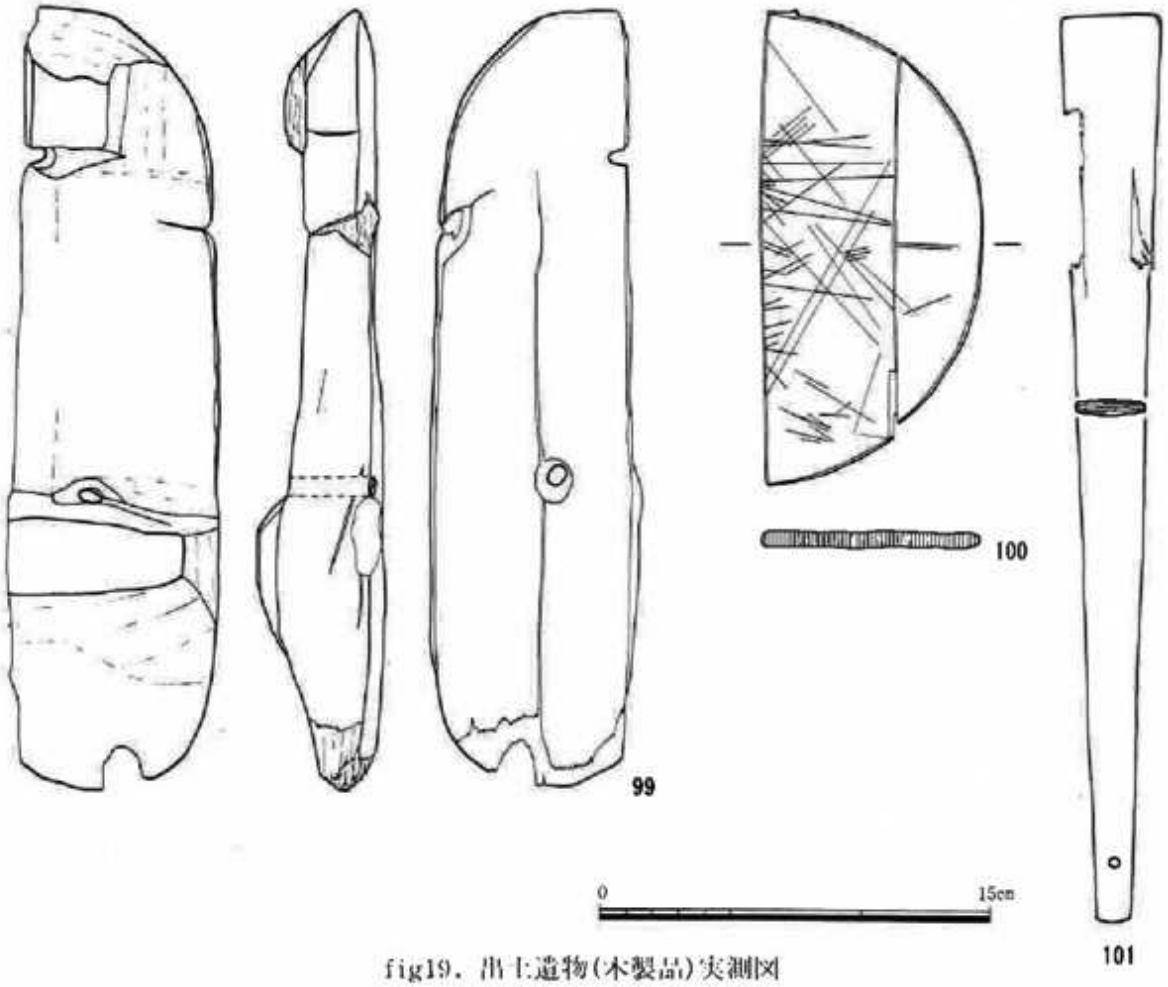


fig19. 出土遺物(木製品)実測図

(4) 石　器

・磨石(fig20)

(102)、(103)はいずれも磨石と考えられるもので、両者とも表面は極めて平滑に仕上げられている。

・砥石(fig20)

(104)～(106)はいずれも砂岩質の小形の砥石である。三者ともに3面ないし4面すべてを使用している。特に(106)には数条の磨痕の溝が2面に認められる。

・石皿(fig20)

(107)は石皿と考えられる石製品である。使用面は中央にいくにしたがって、ややくぼんでいる。また裏面は縁辺部のみを磨いている。使用面には熱を受けた痕跡が認められる。厚さ6.7cmを測る。

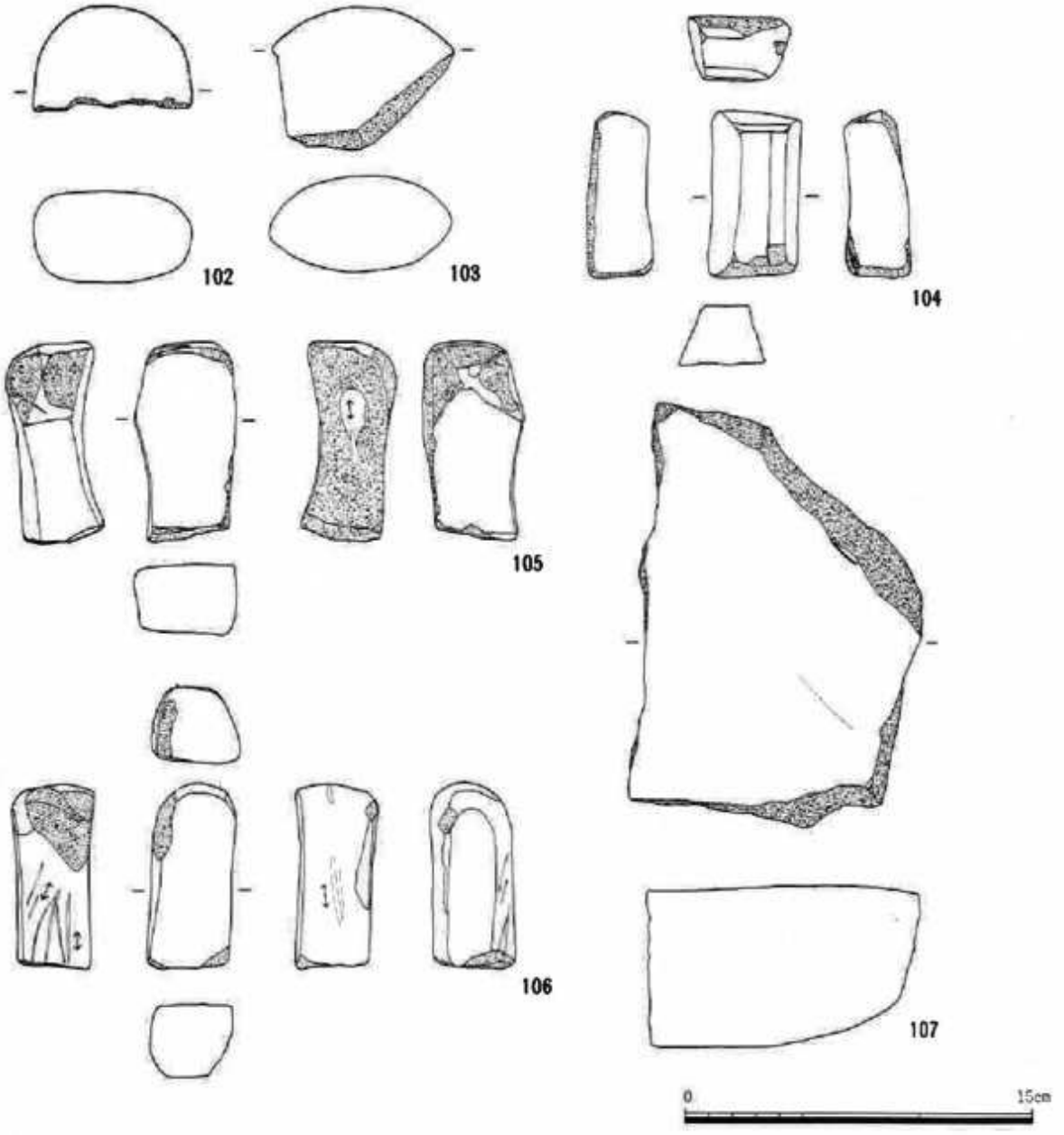


fig20. 出土遺物(石器)実測図

第5章　調査のまとめ

今回の調査は、かんがい排水路事業に伴うもので、非常に限られた面積の調査であった。しかしその調査結果は中多良遺跡の範囲、立地、時期を知るうえで貴重な資料となった。調査のまとめとして、遺跡の立地と出土遺物の考察をおこない、中多良遺跡調査のしめくくりとしたい。

(1) 中多良遺跡の立地

前述したように今回の調査は、かんがい排水路施設に伴うもので、線的な調査であった。しかし、その路線が遺跡を東西に横断することより、遺跡の広がりを知るには良い結果となった。

従来、上多良、中多良、下多良の三集落は天野川の自然堤防上に立地する集落であり、その集落の東側にひろがる水田地帯は天野川の氾濫原であったと考えられていた。ところが調査の結果、この水田地帯のほぼ中央、調査トレンチ2～4には遺構の存在することが明らかとなった。しかし、1トレンチおよび4トレンチ東端以東は耕土直下礫層が地表面下1.8m以上におよぶこともまた明らかとなった。

つまり、上多良、中多良、下多良の東側はその中央部にのみ遺跡が立地し、遺跡の東西は天野川の氾濫原であったことが明らかとなったのである。おそらく現集落が成立した時期は、その位置が自然堤防上であったのと同様、中多良遺跡も遺跡の成立段階で自然堤防上に集落が成立したものと考えられる。しかし天野川の氾濫により集落も移動せざるを得なかったのも事実であろう。遺構面上に堆積する包含層、さらにはその上に堆積する礫層はこの天野川の氾濫を裏付けるものであろう。

このように今回の調査では中多良遺跡の東西の範囲を確認することができた。では南北方向についてはどうであろうか。歴史的環境でも触れたが、南方に関しては、今回調査地の南120 mの地点で、やはり東西方向に横断する調査を実施したが、耕土直下はすべて礫層であった。この結果、中多良遺跡は今回の調査地よりやや南側が遺跡の南限にあたると推定できる。北方に関しては、調査地の北方100 mの地点でやはり東西に横断する調査の結果、今回の中多良遺跡と層序、時期のほぼ一致する本願寺遺跡を確認している。興味深いことは本願寺遺跡も調査地の中央以東は耕土直下礫層となり、天野川の氾濫原であったと推測されることである。[1] つまり今回調査した4トレ

ンチのほぼ北方もそれ以東が氾濫原であり、天野川は、上多良、中多良、下多良集落東側水田地帯の東側を蛇行していたものと考えられ、その西側堤防上に遺跡が立地していたわけである。おそらく中多良遺跡の北限は本願寺遺跡と一致するものであり、2つの遺跡は個別の集落ではなく、同一集落としてとらえられるものであろう。

(2) 遺物――布留式土器と受け口状口縁土器――

今回の調査で出土した古式土師器の大半は遺構面上に堆積する包含層より出土したものである。しかしそれらは型式編年学上、古墳時代前期後半に相当するものであるという認識のうえで若干の考察をおこないたい。

図示した遺物における器種構成は甕39点(42%)、壺9点(10%)、小型丸底壺12点(12%)、鉢1点(1%)、器台11点(12%)、高杯20点(22%)、手焙り形土器1点(1%)となっており、甕が約半数を占め、図示しえなかった多くの破片にも圧倒的多数の甕が認められることより、器種構成の過半数以上を甕が占めることはまちがいない。

この甕について焦点をしぼってみよう。口縁が「く」の字状となる布留式土器は甕のうち12点(30%)を占めている。これらの形態を詳細に観察してみると、まず口縁は体部よりシャープに「く」の字に立ちあがる。体部は球状に近い。口縁端部内側は肥厚し、段をなし、明瞭な稜線を有している。次に調整を観察してみると、外面は、口縁部を横ナデ、体部に横位、縦位のハケを施している。内面は、口縁を横ナデ、口縁と体部の接合部も横ナデ、体部はケズリとなっている。また器壁は概して薄く仕上げられている。

次に近江の在地土器といわれる、受け口状口縁を有する甕を検討してみよう。図示しえた点数は6点で甕全体の15%にすぎない。形態は体部より外反した口縁がさらに屈曲して直上に立ちあがり、端部がわずかに横につまみ出されている。体部は球体に近い。調整は外面、口縁部を横ナデ、体部には多方向への粗いハケを施している。内面は口縁部、体部ともにナデとなっている。体部に関してはハケの痕跡を残すものがあることにより、ハケの後ナデを施したと考えられる。器壁は概して薄い。

古墳時代前期を代表する2タイプの甕は形態に加え、調整にも明らかに違いが認められる。近江八幡市笠原南遺跡では報告者が考察で、受け口状口縁甕の20%に内面ヘラ削りが認められるとし、布留式の浸透後に体部だけが布留式の影響を受けたものとしている。また湖西や湖北においても内面ヘラ削りがかなり認められ、それを北陸地方

の影響と考えている。[2]

今回出土した古式古師器を笠原南遺跡と比較して検討してみると、圧倒的多数の布留式土器が目立つ。しかもその調整は畿内的なものであり、布留式土器の受容が認められる。一方では伝統的な受け口状口縁の甕も生産されるが、その数は減少する。しかもその調整自体にも新手法を用いていないことが認められる。

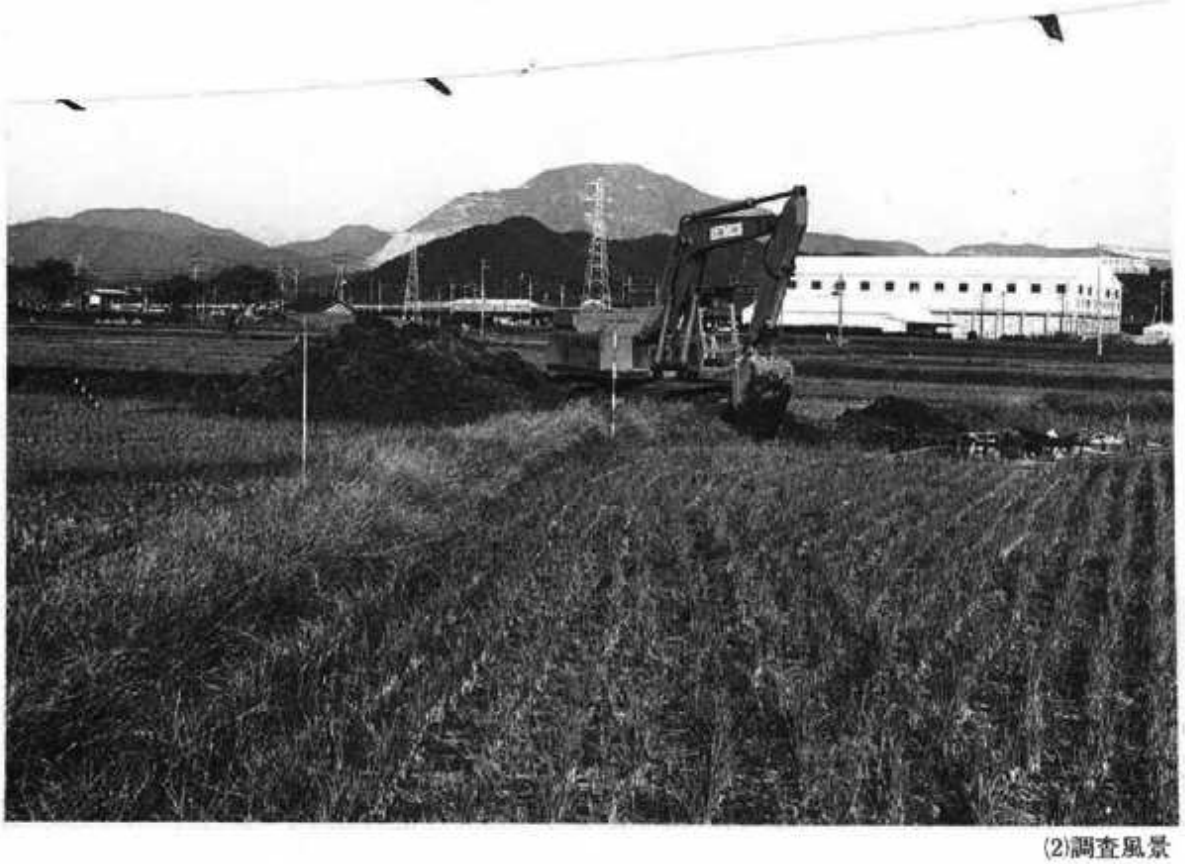
さらに弥生時代全般を通じて、東海地方を中心とする外来系の土器が多く認められていたものが、今回の調査地出土遺物中にはほとんど認められなくなる。つまり弥生時代における東方との関わりが、古墳時代にはいると逆転し、布留式土器に代表される畿内的要素が強くなるといえるのである。この現象は、中多良遺跡のみならず、古式土師器が出土する町内遺跡全般にもあてはまることである。

なお、布留式甕、受け口状口縁甕とまったく異なる甕の存在がある。(28)～(30)に認められる甕は、口縁が直立に近い形状でたちあがっている。体部は粗いハケを施し内面は体部上方に粘土の輪づみ痕を残している。そして体部中央以下はケズリとしている。同じ手法で（21）は口縁端部内面を肥厚させ段を設けており、布留式土器に類似させている。この１群が、在地土器と畿内的土器の受容とにどのように位置するかを、今後の湖北地方における古墳時代前期の土器研究の課題としておきたい。

注 ① 米原町教育委員会『本願寺遺跡発掘調査報告書』1989

② 森 格也「Ⅴ笠原南遺跡の理解と今後のために 1.弥生時代終末～古墳時代初頭の笠原南遺跡（ロ）出土遺物から」（『笠原南遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会，（財）滋賀県文化財保護協会 1987）

(1)調査地全景（西から）



(2)調査風景

PL.2　遺跡

(1)調査風景

(2) 4 トレンチ遺物出土状況

(1) 4 トレンチ遺物出土状況

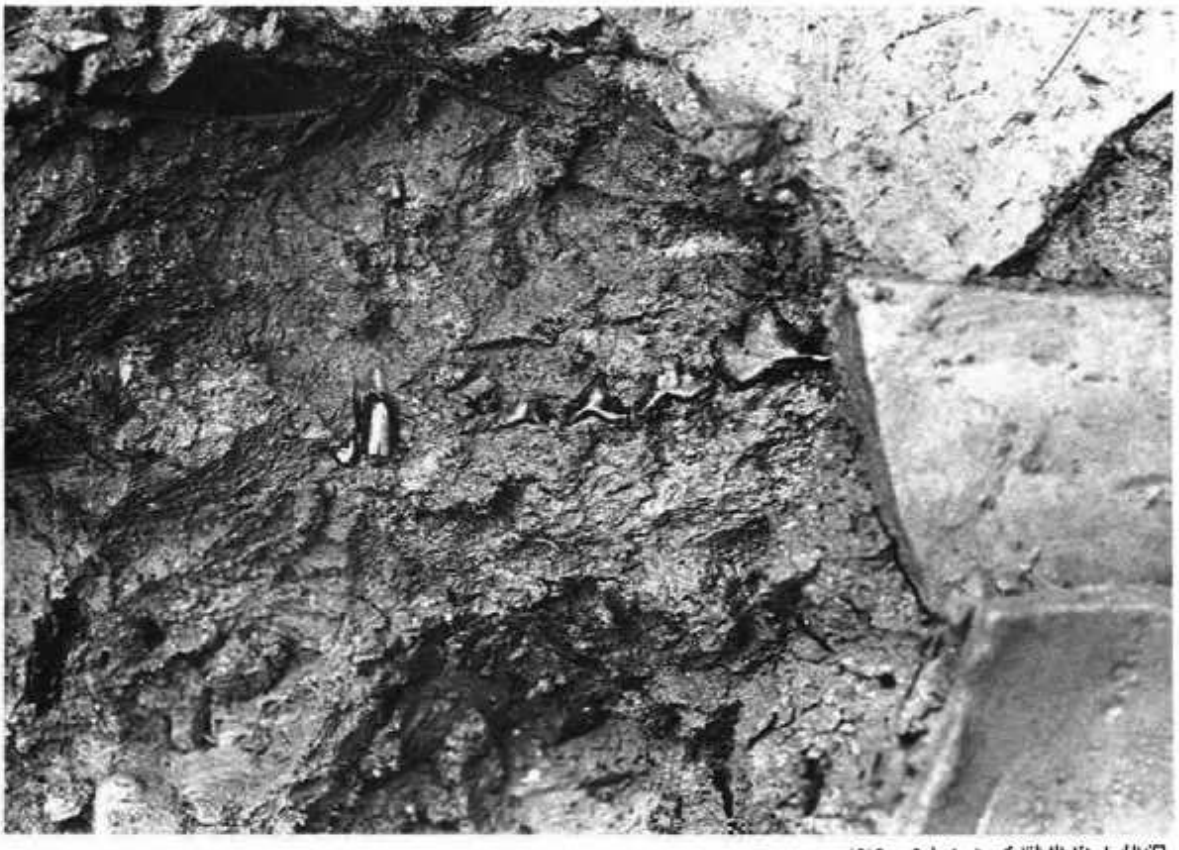
(2) 4 トレンチ遺物出土状況

PL.4　遺跡

(1)3－2トレンチ遺物出土状況

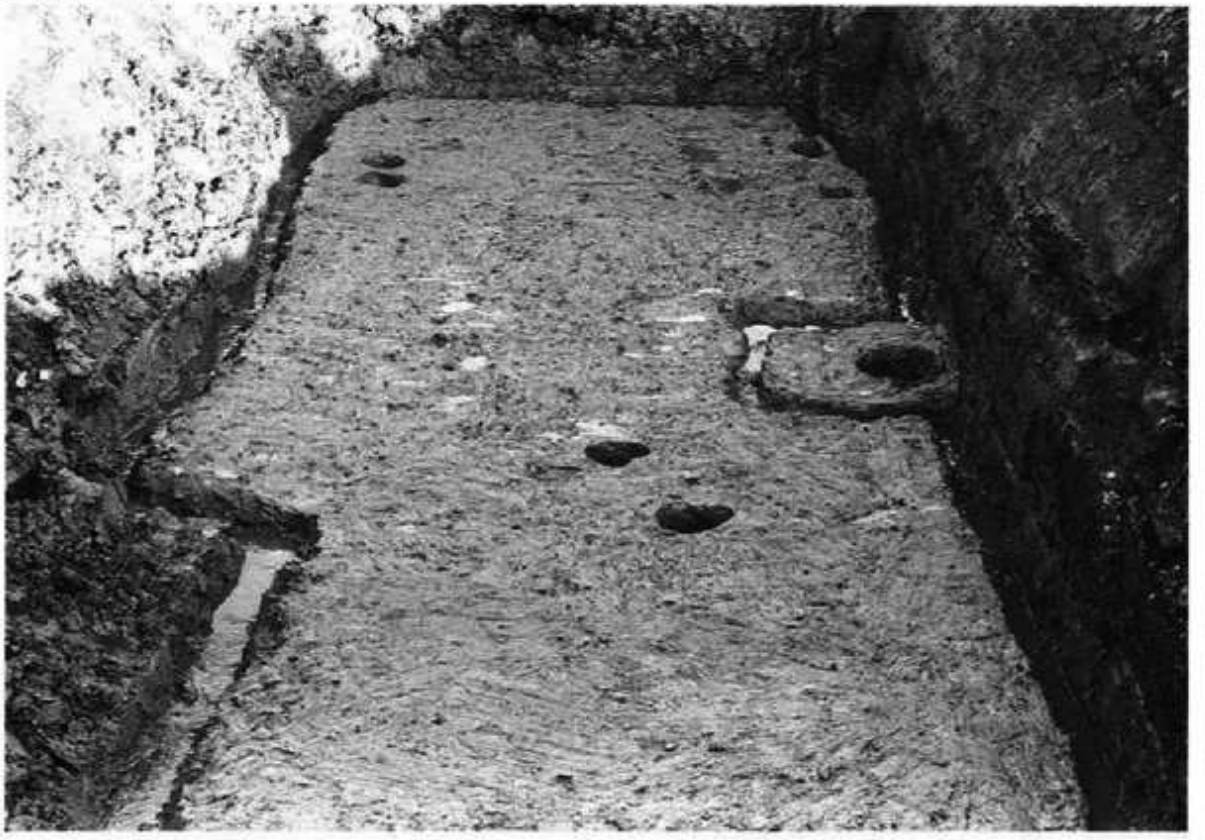
(2)3－2トレンチ遺物出土状況

(1)3−2トレンチ遺物出土状況



(2)3−2トレンチ獣歯出土状況

PL.6　遺跡



(1) 4 トレンチ遺構（西から）

(2) 4 トレンチ南壁土層断面

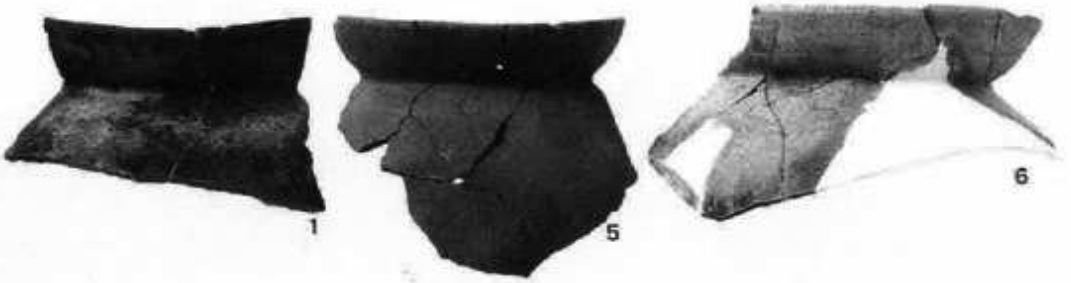
(1)3－2トレンチ遺構（西から）

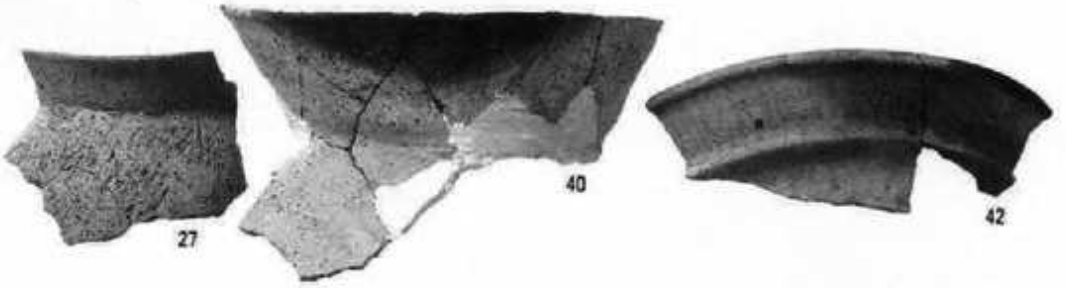
(2)3－2トレンチ遺構（北西から）

PL.8 遺跡

(1)3−2トレンチＳＫＯ2遺物出土状況

(2)3−2トレンチ P21





土師器

PL.10 遺物

8

11

9

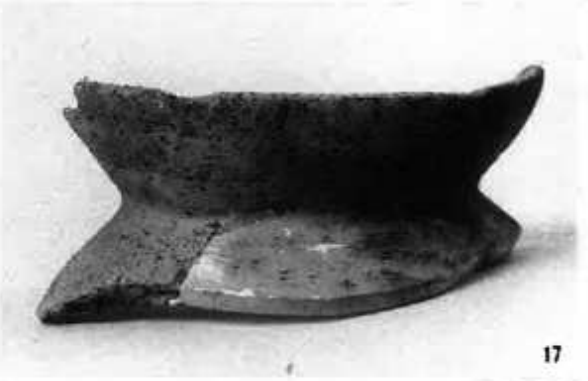
12

10

13

土師器

14



17

18

15

19

16

20

土師器

PL.12 遺物

21

25

22

26

23

28

24

土師器（22：3−2トレンチＳＫ02）

29

32

30

33

31

34

土師器

PL.14 遺物

35

38

36

39

37

47

土師器

41

46

43

45

44

48

土師器

PL.16 遺物

49

52

50

53

51

54

土師器

55

58

56

59

57

60

土師器

PL.18 遺物

61

65

62

66

63

67

64

68

土師器

69

72

70

73

71

74

土師器

75

79

76

80

77

81

78

土師器

82

86

83

87

84

88

85

89

土師器

PL.22 遺物

90

93

91

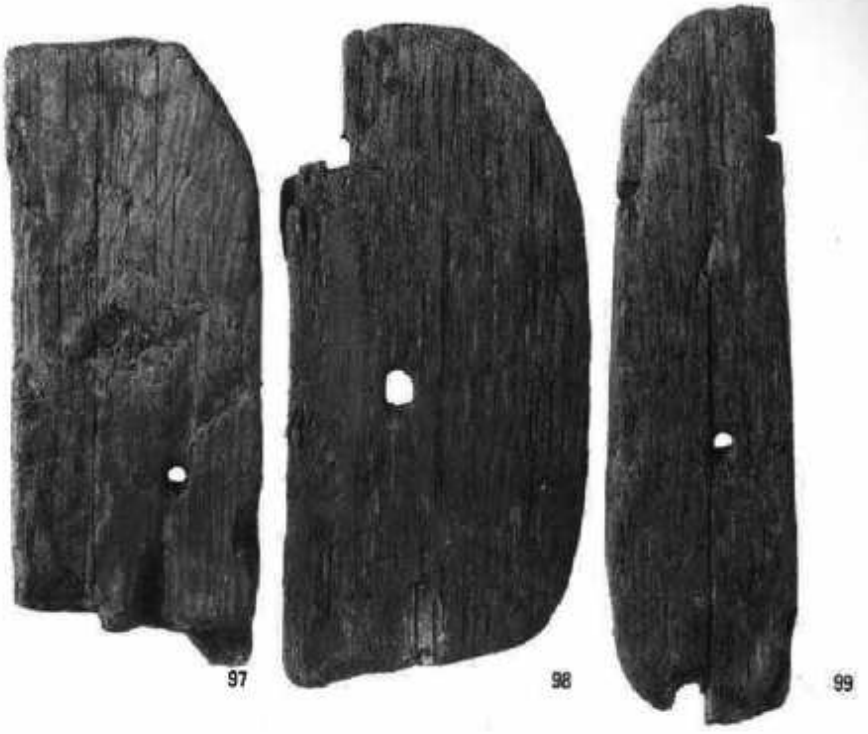
94

95

92

96

土師器、須恵器



(1)木製品

(2)同上裏面

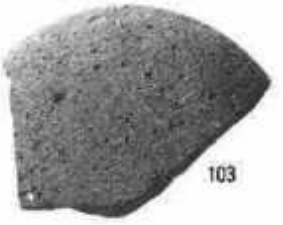
PL.24 遺物

100

101

(1)木製品

102



103

107

104

105

106

(2)石器

米原町埋蔵文化財調査報告XI

中多良遺跡発掘調査報告書

－県営かんがい排水路事業に伴う発掘調査－

平成元年３月25日　印刷
平成元年３月31日　発行

発行　米原町教育委員会
滋賀県坂田郡米原町下多良3丁目3番地

印刷　立木印刷
滋賀県坂田郡米原町醒ヶ井４７８－１